

Tokyo Art Research Lab

思考と技術

と対話の

学校

基礎プログラム



2014

Annual Report

Tokyo Art Research Lab
思考と技術と対話の学校
基礎プログラム
Annual Report 2014

人手から人材へ 森司……………2

「思考と技術と対話の学校」基礎プログラムとは……………4

01 仕事を知る……………10

02 思考を深める／想像を広げる……………20

03 情報収集力を身につける……………28

04 現場に出会う……………30

後期課題（グループワーク）……………32

受講生データ……………34

スクールマネージャー座談会……………38

2014年度実施プログラム……………40

人手から人材へ

アートプロジェクトの現場における人材難問題を解決する。大上段に構えて言えば、この悩みを解決するために「思考と技術と対話の学校」ははじまった。東京アートポイント計画のTokyo Art Research Lab (以下、TARL)では、これまでもアートプロジェクトの現場やアートマネジメントのさまざまな局面で必要とされる知識や技術を講座化し、さらにはその成果を「教本」「副読本」「手引き書(ガイドライン)」などに編集してきた。広く一般に活用してもらうためTARLのサイトページからのダウンロードを可能にしてある。さらに現場での課題を解決する手法(例えばデジタルアーカイブの残し方)を開発する取り組みを続けてきた。そんな我々が得た1つの答えが、企画から実施、検証から報告といった活動プロセスの全体を知り、その時々で必要とする技術を持つ人材の育成だった。そこで5年目を迎えた2014年度のTARLでは、アートプロジェクトを担う人材の育成を掲げ、「思考と技術と対話の学校」を開校した。そのメインプログラムである基礎プログラムは、少数精鋭、32名1クラスだけの通年コースであり、さらに3年で卒業とする設計のプログラムとして組まれている。そして、本年度は26人が1期生としてコースを修了した。

基礎プログラム1年目では、どちらかと言えば、「思考」の項目を厚めにしている。人材として有用性をアピールできる「技術」に関する講義は2年目にまわした。「対話」の部分は1グループ8名の受講生と担当スクールマネージャーとのやりとりを通じて行われた。修了検定を兼ねたグループでの最終発表では、現場の第一線で活躍する講師陣の質量感ある身体的な言葉が、色濃く反映されていた。その分、未学習の部分に関する意識、知識、技術の弱さは歴然としていた。しかし、そのことに受講生たち自身が一番気づいてくれていた。つまり、アートプロジェクトのマネジメントに必要な事柄の包括的な理解、その理解を基礎にアクションする能力(技能)を獲得するためには、座学と現場の両方が必要となる。最

終的には緊張感を伴い、汗する現場でのOJTが不可欠になることは自明だ。3年目にはそのような場の用意も考えている。段階を追ってキャリア形成をする筋道のひとつとして「思考と技術と対話の学校」が役立つことを願いカリキュラムのブラッシュアップを続けていきたい。1期生は33人のゲストから延べ60時間の講義を受けた。準備としての自習は負荷を感じるレベルで課した。講義を聴くごとに情報過多の状態を生み出していたと思う。それは受講生たちが持つ「アート観」(そんなものは持っていないとする人が最も強固な固定概念を持っていたりするものだ)を揺さぶることが目的でもあったからだ。深夜バスや新幹線を使い通った現役の学生から、バリバリ働く社会人までがキャリアパス、キャリアチェンジを胸に抱き、想いの熱を冷ますことなく通学してくれた。その熱量がスタッフの励みの源泉でもあった。1年365日の中の11日間に過ぎないささやかな時間ながら、アートプロジェクトの正体を捕まえるために、各々が格闘しながら日々の時間を費やしていた。近い将来、講義の場で出会った仲間と講師との連携から新しい何かが生み出されてくることを期待し、今後も文化事業や人材育成が実を結ぶまで、必要とする時の積み重ねを許す場を確保していきたい。「思考と技術と対話の学校」の1年目を終え、我々も多くを学んだ。2年目に向けて学校のあるべき姿を新たに想い描いている。

森 司
東京アートポイント計画ディレクター
「思考と技術と対話の学校」校長

「思考と技術と対話の学校」基礎プログラムとは――

アートプロジェクトを動かす力を身につける学校



アートプロジェクトを動かす人に求められる能力を、

「思考」「技術」「対話」という3つの言葉で表現することにしました。

「思考」は、社会動向を見据え、どのようなプロジェクトの提供が必要となるか、また、そのために求められるオペレーティングシステム(OS)を思考する能力のこと。

「技術」とは、文字通りスキル。

会議の設定の仕方からプロジェクトの現場の仕切り方といった実務、

記録をアーカイブ化し未来へと発信すること、また評価までのマネジメントループなど、

さまざまな局面で必要とされる事柄を知り遂行できるようになること。

「対話」は、「思考」「技術」を鍛えるための必須能力のみならず、

1人の力で為し得ることができないプロジェクトの情報を共有し、

新たな展開を切り開くための能力。

本校では、これら3つの基礎力の習得を通して、

既存の概念や枠組みにとらわれず新たな発想で、

アートを切り口に社会的な課題と向き合っていくことのできる人材、

そして、これからの時代に必要とされるアートプロジェクトを構想し、

形にすることができるアートマネージャーのプロの育成を目指します。

基礎プログラム1年目を終えて

今年度の「基礎プログラム」受講生は、アートプロジェクトの現場に有給スタッフ、またはボランティアとして関わっている人、鑑賞者として関わってきたが、今後はより運営側に入っていきたいと考えている人などの32名で構成された。20代から50代までの多様な経験とスキルを持つ学生や社会人である。

現場経験者にとっては、アートプロジェクトに出会ったばかりの受講生からの率直な疑問や意見、そしてゲストから投げかけられるさまざまな視点や問いを通して、改めて自分の活動について考え、活動を表現する「言葉」に磨きをかける機会となったと言えるだろう。また、現場未経験者にとっては、多様なアート活動の事例に触れる場であると同時に、経験値の高い受講生から身体的な経験をもとにアドバイスを受ける場となっていた。

他業種で働く人の中には、丁寧に時間をかけ、あえて回り道をしながら進んでいくアートプロジェクトのある種の非効率的な動き方に戸惑いを覚えたり、文化事業の予算規模に驚いたりする人もいた。しかし回を重ねるごとに、そのようなアートプロジェクトの在り方を理解し、少数精鋭で厳しい条件のもと踏ん張っている事務局の存在についても認識することができたようだ。そしてその状況をふまえて、自分としてどのようなスキルを生かすことができるのかを考えるに至っていた。

全11回の授業を受け、プロとして現場で働きたいと志を強く持つ人もいれば、ボランティアを選ぶ人もいた。また、現場を外から支えることを希望する人もいれば、複数の現場に足を運んでみた上で、ここで語られているアートの世界に入り込むことができなかったという人もいた。それは1年間かけて、アートプロジェクトとは何かをそれぞれが考え、どう関わるか真剣に向き合ってきたからこそその成果だと言えるだろう。

4つのプログラムでは、徹底的に情報を吸収し、自分の言葉でアウトプットしていくことに力を入れた。前期の課題やテストを通して、受講生たちはいかに情報を身体の中に入れていくことが容易ではないかを体感する。しかし後期になると徐々に身体が慣れてきたのか、授業での手応えを感じる様子も同えた。授業では答えのない対話がつづけられ、受講生はモヤモヤすることの連続だったという。わかりはじめたと思ったら最後にまたわからなくなったという正直な意見もあがっていた。

本プログラムでは、問いを立てることを大切にしてきた。1年目のプログラムでは、そのための基礎力は鍛えられたのではないだろうか。これからの時代に求められるアートプロジェクトとは何か、プログラム内容も日々更新しながら、今後も本校に集う受講生やゲストとともに考えていきたい。

日程 2014年(平成26年)-2015年(平成27年)
 [前期] 6月22日、7月6日、20日、8月3日、24日、9月7日
 [後期] 10月5日、11月9日、12月14日、1月18日、2月1日
 (すべて日曜開催)
 午前の授業:10:15-13:00 / 昼休憩:13:00-14:00 /
 午後の授業:14:00-17:30

【実施概要】

対象 ジャンル・分野を問わず、アートプロジェクトの運営に関わっている人、関わる意思のある人

募集人数 30人

受講形式 通年(原則として、全日参加)

会場 東京文化発信プロジェクトROOM302
 東京都千代田区外神田6-11-14 [3331 Arts Chiyoda 3F]

受講料 一般 60,000円/学生 40,000円(最大10人まで)

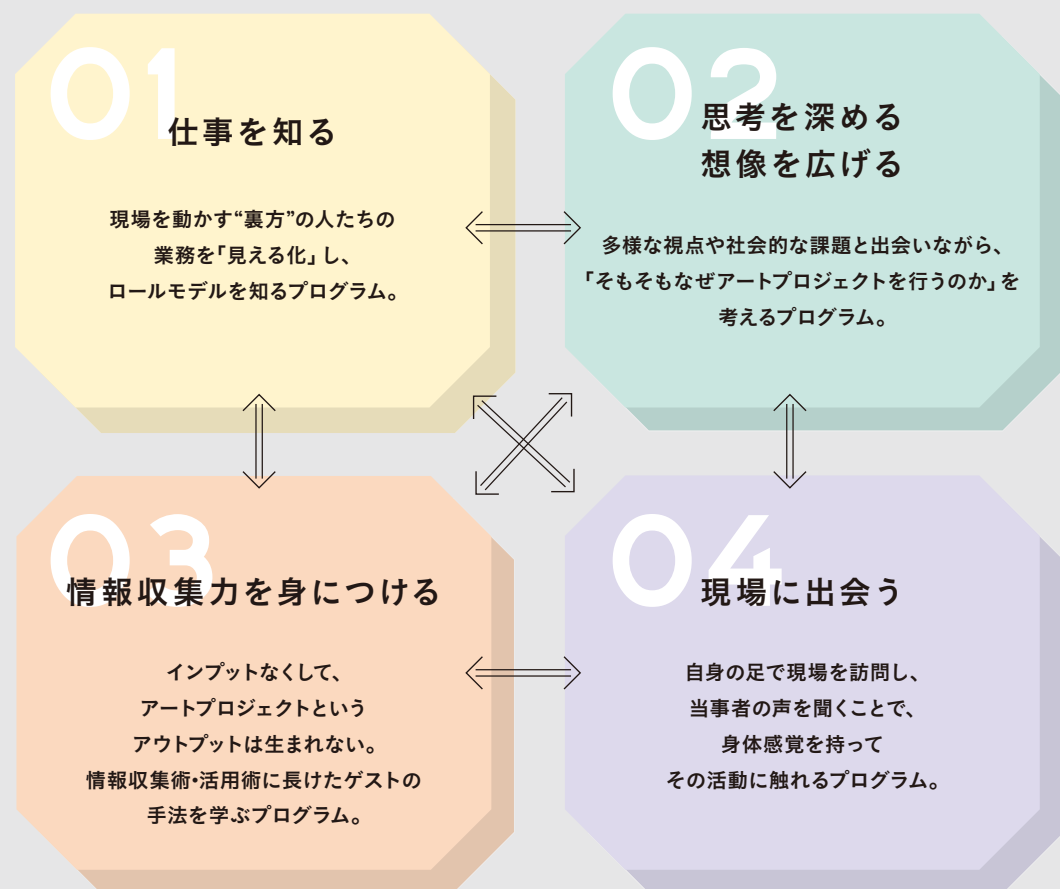
主催 東京都、東京文化発信プロジェクト室
 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

企画協力 一般社団法人ノマドプロダクション

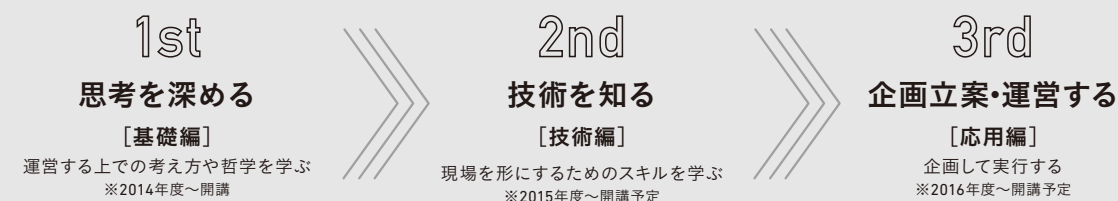


「基礎プログラム」を構成する4つのアプローチ

基礎プログラム1年目は、思考力、想像力を鍛える授業を中心に展開しました。「思考を深める／想像を広げる」では、多様な視点や社会的課題に触れながら、アートプロジェクトや、そこで語られるアートとは何かについて思考し、「仕事を知る」では、運営を担う人々の役割や振る舞い方を学び、自分はどういう立場でアートプロジェクトと関わっていくかを考えることを狙いに授業が構成されました。その2つを補完する「現場に出会う」と「情報収集力を身につける」は、より具体的に現場のイメージを描き、また準備や発想のための基礎体力をつけるための授業です。受講生は、ゲストによるレクチャーや、授業で繰り広げられる対話、そして課題を通して、なぜアートプロジェクトを行うのかという問いを立てながら学びを積み重ねていきました。



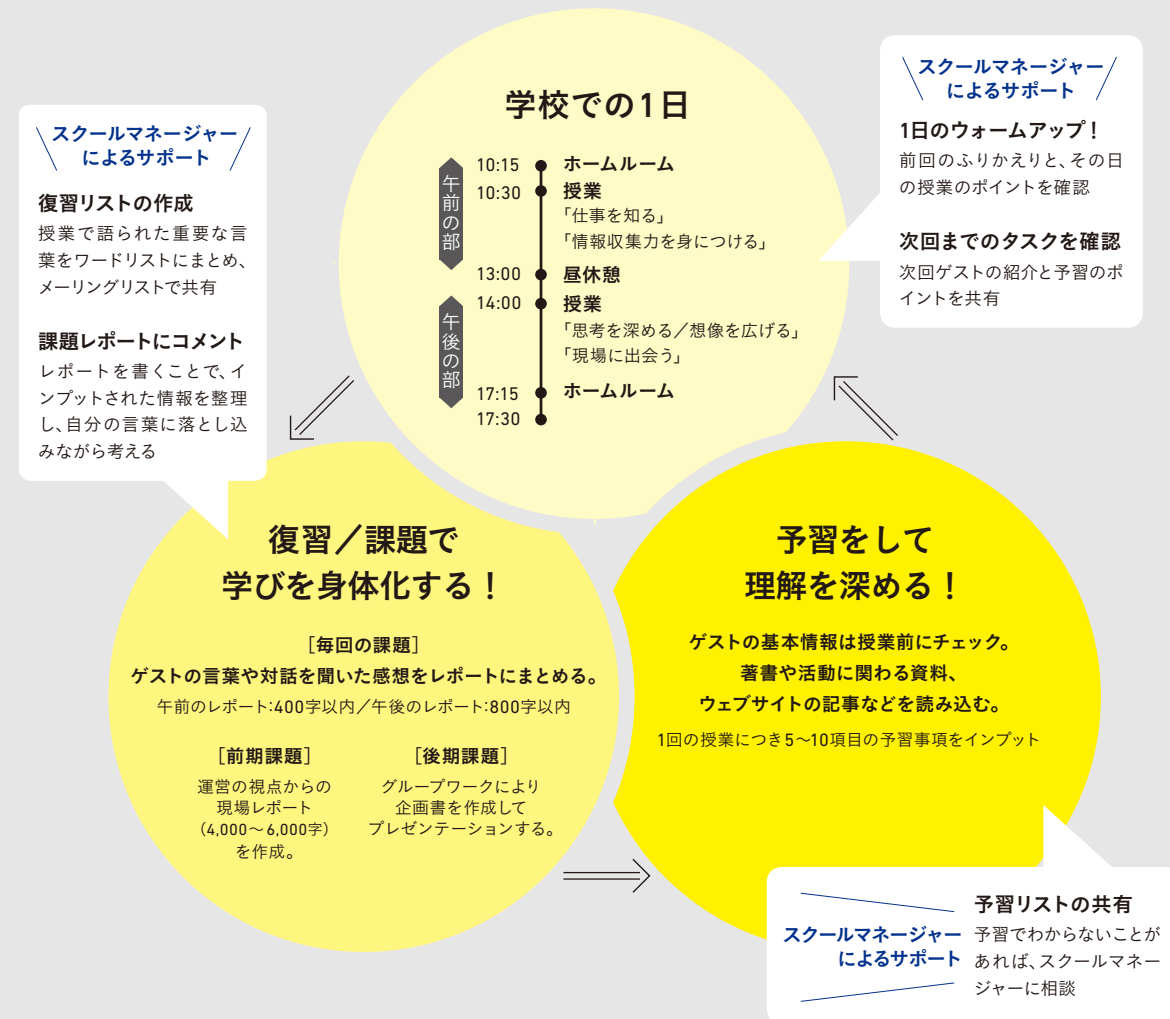
「基礎プログラム」は三カ年計画でカリキュラムを構築しています。



学びのサイクル

2014年度は、アートプロジェクトを運営する上での考え方を学び、現場の実態を知ること重点を置き、カリキュラムを構成しました。

- point.
- ① 4人のスクールマネージャーが、受講生の伴走者として学びをサポート
 - ② 32名の受講生が、8人ずつ4グループにわかれて授業に参加
 - ③ 授業で吸収した情報を、書いて、話して、自分の中に落とし込む



年間を通したスクールマネージャーによるサポート

個人面談 [前期/後期]

受講生それぞれにヒアリングの機会を設定。前期の面談では、1年間の到達目標を確認。後期の面談では、今後のキャリアプランや、次年度以降の受講についても話し合いました。

現場のコーディネート [後期～]

現場がない受講生には、スクールマネージャーがアートプロジェクトの現場への見学や、ボランティアとしての参加などをマッチング。個人面談でのヒアリングを受けて、コーディネートを行いました。

情報提供 [随時]

ゲストや授業に関わる情報ははじめ、スクールマネージャーが入手した旬のアートプロジェクトの開催情報、募集情報などを、メーリングリストを用いて受講生と共有していきます。

1年の流れ

6

6.22

ガイダンス

- 開校にむけて
- 受講生による自己紹介
- 基礎プログラムについて
- アーティストトーク+交流会

GUEST

EAT&ART TARO [アーティスト]

7

7.6

仕事を知る

→P.12

あらゆる人たちとのネットワークを構築し、現場をまわす

GUEST

芦立さやか [HAPS事務局長]

HOST

橋本誠 [スクールマネージャー]

思考を深める/想像を広げる

→P.21

“生活”と“仕事”と“表現”の境界を生きること

GUEST

安岐理加 [美術家/てしまのまど代表/元路地と人メンバー]

蛇谷りえ [うかぶLLC]

渡邊太 [社会学者]

MODERATOR

吉澤弥生 [共立女子大学文芸学部専任講師]

7.20

情報収集力を身につける

→P.29

あらゆる日常を素材として捉える

GUEST

アサダワタル [日常編集家]

HOST

橋本誠 [スクールマネージャー]

思考を深める/想像を広げる

→P.22

アートプロジェクトは地域社会をどう読み込むか?

GUEST

藤浩志 [美術家/十和田市現代美術館館長]

新雅史 [社会学者]

MODERATOR

佐藤慎也 [日本大学准教授/建築家]

8

8.3

仕事を知る

→P.13

地域とのつながりをつくり、必要な環境を整える

GUEST

松尾真由子 [Breaker Project事務局長]

HOST

橋本誠 [スクールマネージャー]

現場に出会う

→P.31

「Art Center Ongoing」と「TEMPO de ART」

GUEST

小川希 [TERATOTERAチーフディレクター/Art Center Ongoing 代表]

9

9.7

仕事を知る

→P.15

組織の経営やアーティストの環境を考える

GUEST

中村茜 [株式会社PRECOG代表取締役/NPO法人ドリフターズインターナショナル代表理事]

HOST

橋本誠 [スクールマネージャー]

前期まとめ

- 前期のまとめクイズ
- 前期の授業ふりかえり
- グループディスカッション

10

10.5

仕事を知る

→P.16

現場の人・コト・モノの動きをマネジメントする

GUEST

鈴木拓 [boxes Inc. 代表]

HOST

佐藤李青 [スクールマネージャー]

現場に出会う

→P.31

「TRANS ARTS TOKYO」と「3331 Arts Chiyoda」

GUEST

久木元拓 [一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドNプロジェクトマネージャー]

宍戸遊美 [3331 Arts Chiyoda 地域担当マネージャー]

11

11.9

仕事を知る

→P.17

作品を一番良い状態で展示する

GUEST

大木彩子 [株式会社アートフロントギャラリー]

HOST

坂本有理 [スクールマネージャー]

思考を深める/想像を広げる

→P.24

創造性を引き出すプラットフォームとしての場と自治

GUEST

青木淳 [建築家]

会田大也 [ミュージアムエデュケーター/東京大学GCL育成プログラム特任助教]

MODERATOR

渡辺ゆうか [FabLabKamakura,LLC 代表/慶應義塾大学SFC研究所訪問研究員]

12

12.14

情報収集力を身につける

→P.29

自分の身体に入れる、なじませる、コンディションをつくる

GUEST

長島確 [ドラマツルク/翻訳家]

HOST

及位友美 [スクールマネージャー]

思考を深める/想像を広げる

→P.25

いかにして人々は共にあるのか— 共在をめぐる対話から

GUEST

木村大治 [京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科教授]

久保田翠 [NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長]

MODERATOR

石幡愛 [としまアートステーション構想事務局/一般社団法人オノコロ]

2015.1

1.18

仕事を知る

→P.18

芸術分野の専門員として、企画立案・調整などを行う

GUEST

大澤苑美 [八戸市まちづくり文化スポーツ観光部芸術環境創造専門員]

HOST

坂本有理 [スクールマネージャー]

思考を深める/想像を広げる

→P.26

アートが生み出す公共性や価値とは何か

GUEST

遠藤水城 [インディペンデント・キュレーター]

齋藤純一 [早稲田大学政治経済学術院教授]

MODERATOR

毛利嘉孝 [社会学者/東京藝術大学准教授]

2

2.1

仕事を知る

→P.19

まちでアートを展開するため地域との関係をつくること

GUEST

吉田有里 [アートコーディネーター]

HOST

橋本誠 [スクールマネージャー]

後期まとめ

→P.32

- 帆足亜紀さんのミニレクチャー
- 後期課題の発表(グループごと)
- 修了証の授与+受講生による感想

COMMENTATOR

帆足亜紀 [アートコーディネーター]

COMMENTATOR

吉田有里 [アートコーディネーター]

COMMENTATOR

森司 [校長/東京アートポイント計画ディレクター]



仕事を知る

アートプロジェクトはどのように形づくられていくのか。
現場を動かしていくマネジメントの仕事、現場で直面する課題について、
受講生がゲストとともに考える授業。

今まさにアートプロジェクトの現場を動かしている事務局の方々に、準備／企画／実施／記録・報告／検証・評価といった日常業務についてお話いただいた。具体的なプロジェクトの内容ではなく、日々の現場での振る舞い方や心得、ゲストなりの手法や必要なスキルなどについて聞くことで、アートプロジェクトを動かす人たちに求められる能力を知ることができるプログラム。

立場の違いから見る、マネジメントの仕事

組織を経営する人



中村 茜 →P.15

[株式会社PRECOC代表取締役/
NPO法人ドリフターズ・インターナショナル代表理事]

“組織の経営や
アーティストの環境を考える”

フリーランスで仕事をする人



林 暁甫 →P.14

[プロデューサー / 林暁甫事務所代表]

“人間の想像力を拡張させる
アートとの出会いを生み出す”

組織を動かす人



芦立 さやか →P.12

[HAPS事務局長]

“あらゆる人たちとのネットワー
クを構築し、現場をまわす”



松尾 真由子 →P.13

[Breaker Project 事務局長]

“地域とのつながりをつくり、
必要な環境を整える”

現場をつくる人



鈴木 拓 →P.16

[boxes Inc. 代表]

“現場の人・コト・モノの動きを
マネジメントする”



大木 彩子 →P.17

[株式会社アートフロントギャラリー]

“作品を一番良い状態で
展示する”

行政の立場にいる人



大澤 苑美 →P.18

[八戸市まちづくり文化スポーツ観光部
芸術環境創造専門員]

“芸術分野の専門員として、
企画立案・調整などを行う”

まちづくり団体の立場にいる人



吉田 有里 →P.19

[アートコーディネーター]

“まちでアートを展開するため
地域との関係をつくる”

Case
1

HAPS事務局長

芦立さやかさんの“仕事”

Sayaka Ashidate



わたしの“仕事”は、

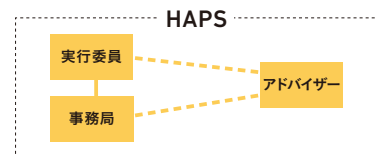
あらゆる人たちとのネットワークを
構築し現場をまわすこと！

京都の若手芸術作家を支援する「HAPS*」の事務局長として、実行委員会で決定した事業の実行を担います。アーティストのよろず相談窓口の開設、作家と大家をつなぐ物件マッチングや、展示のコーディネート業務などに加え、組織のマネジメントもしています。

*東山 アーティスト・プレースメント・サービス

Q1 どのような組織体制で運営していますか？

事業の方向性や予算を決議する実行委員会（実行委員長・遠藤水城、副実行委員長・小崎哲哉のほか14名）、具体的に事業を遂行する事務局（事務局長・芦立さやか、事務局スタッフ2名、アルバイトスタッフ数名）が連携して、よりスムーズなサポートの実現を目指します。時折、アドバイザー（アーティストや芸術系大学の学長のほか11名）から意見をいただき、より広域なネットワークを構築します。



Q2 これまでの職歴を教えてください。

「BankART1929」ではイベント運営やスタジオ事業に携わり、NYではNPOのインターンしながらアーティストの制作環境についての調査をしました。

2005 「BankART1929」勤務

- ≡ 吉田有里とともにユニットスペース「YOSHIDATE HOUSE」(横浜)運営

2010 NYに拠点を持つアーティスト・イン-

- ≡ レジデンスのコーディネートを行う「Residency Unlimited」にてインターン

2011 HAPS事務局勤務

Q3 現在抱えている課題について、教えてください。

ひとつは、市場の論理では成立しない、まちづくりや芸術家の支援を、公的な資金を使って継続することの必要性をどうアピールし評価を得て予算を継続させていくかということ。芸術家からの相談を解決するために事業を展開する性質上、プログラムの幅が多岐におよび、全体像が見えにくくなってしまいます。軸をぶらさず、なおかつ、HAPSの活動を一般的にわかりやすく伝えていきたいと思っています。

あしだて・さやか

1982年生まれ。武蔵野美術大学芸術文化学科卒業後、「BankART1929」に勤務。退職後、さまざまなプロジェクトで展覧会制作やアーティストのコーディネートなどに関わる。現在は、HAPS事務局勤務。

Case
2

Breaker Project 事務局長

松尾真由子さんの“仕事”

Mayuko Matsuo



わたしの“仕事”は、

地域とのつながりをつくり、
必要な環境を整えること！

大阪の地域密着型アートプロジェクト「Breaker Project」にて、ディレクターのもとで地域とのつながりづくりや調整をはかり、スケジュールを管理、広報資料や助成金申請書・報告書などを作成しています。プロジェクトの数値化できない価値を見える化していく作業が課題です。

Q1 どのような組織体制で運営していますか？

大阪市職員(3名)と民間有識者(4名)で構成される実行委員会が組織され、プロジェクトの企画・運営者としてディレクター・雨森信が任命。そのもとに事務局(常勤1名、非常勤2~3名)とプログラムディレクター(3名)を配置し、活動しています。

Q2 これまでの職歴を教えてください。

美術大学を中退後、出産・子育てを機に共同自主保育での活動や、アートセンターでのボランティアスタッフなどに関わっていました。

2008 「Breaker Project」事務局スタッフ

- 2009 「水都大阪2009」にて藤浩志「かえるシステム」サブディレクター兼任

2011 「Breaker Project」事務局長に就任

Q3 地域において、どのような方法でプロジェクトを展開していますか？

アーティストと地域の双方にとって有効な創造の現場をまちの中に生み出しています。そこで重視しているのは、「アーティストが地域に入り、実験的な表現活動に時間をかけて取り組む環境づくり/地域に根ざした作品が生み出されること」と、「そのプロセスを開き、地域住民と様々な関わりを生み出していくためのマネジメント」です。

その手法は、以下4つの特徴に分けることができます。

- ① サイトスペシフィック (場所を使う/風景を変える)
- ② フィールドワーク(取材/素材を収集する)
- ③ 参加型(住民の主体的な参画を誘発する)
- ④ 連携(地域の施設や組織と共働) ...地域コーディネーターの発掘

まつお・まゆこ

1981年大阪府生まれ。文化芸術活動のつなぎ手になりたいという思いから、参加者やサポートスタッフとして関わっていた「Breaker Project」に事務局スタッフとして勤務。現在は、同プロジェクトにて事務局長として常勤。

プロデューサー／林曉甫事務所代表

林曉甫さんの“仕事”

Akio Hayashi



わたしの“仕事”は、

人間の想像力を拡張させる
アートとの出会いを生み出すこと！

現在は東京と鳥取のアートプロジェクトに関わり、ディレクターやプロデューサーとして動いています。事業ごとに関わり方は異なりますが、企画立案や進行管理、運営業務などが主な仕事です。

Q1 仕事を進める上でのポリシーは何ですか？

アートは社会に不可欠であると思いつつながら、現場の状況を観察しその状況や事実に基づき、判断し進めることを考えています。

Q2 これまでの職歴を教えてください。

NPO法人BEPPU PROJECTの職員として、大分県別府市で開催された芸術祭などに関わってきました。

- 2008 NPO法人BEPPU PROJECT (大分) 勤務 [-2013]
- 2009 International Exchange Placement Programme派遣員(ロンドン)
- 2012 別府現代芸術フェスティバル2012 「混浴温泉世界」事務局長 (大分)
- 2014 鳥取藝住祭2014総合ディレクター(鳥取)

Q3 アートプロジェクトを動かす上でのコツや大事なことは？

関わるプロジェクトごとに求められることが違うので、まずは自分の役割を確認します。また、以下のことを心がけています。

- ①現場では、自分ですべてを決めようとはせず、プロジェクトの方向性を確認したら、基本的には現場担当者に判断を委ね、現場優先でプロジェクトを進めるようにしています。
- ②アートプロジェクトで大事なことは、人々がいかに自分ごととしてプロジェクトをとらえられるかどうか。それによって関わり方の濃度が変わってくると思います。
- ③運とご縁を大切にすること。そして自分の想像を超える出来事を楽しむことだと思います。

はやしあきお

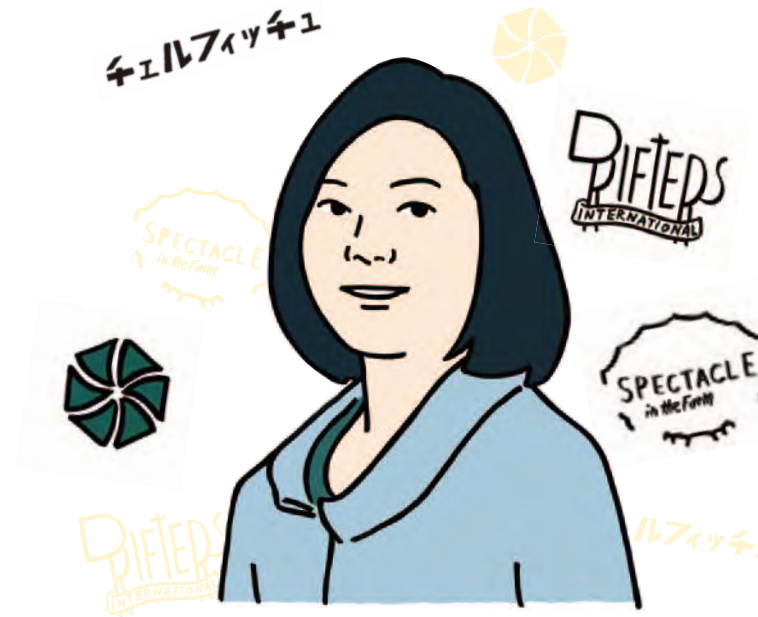
1984年東京生まれ。立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。卒業後、NPO法人BEPPU PROJECTに勤務。2013年よりフリーランスとして、鳥取藝住祭2014総合ディレクターなどを務める。

株式会社PRECOG代表取締役／

NPO法人ドリフターズ・インターナショナル代表理事

中村茜さんの“仕事”

Akane Nakamura



わたしの“仕事”は、

組織の経営やアーティストの
環境を考えること！

パフォーミングアーツ・プロデューサーとしてさまざまな仕事に携わり、日本や舞台芸術ファンにとどまらず開かれた層に向けて発信していきたいと考えています。「環境が整っていないならつくれば良い」という姿勢を大切にしています。

Q1 これまでの職歴を教えてください

大学時代から舞台芸術に関わり、経験を積んできました。演劇やダンスという概念にとられない新しい試みに挑戦しています。

- 2004 STスポット横浜プログラムディレクター [-2008]
- 2006 株式会社PRECOGを設立
- 2008 同社代表取締役に就任
- 2009 NPO法人ドリフターズ・インターナショナル設立
- 2012 「国東半島アートプロジェクト2012」および「国東半島芸術祭2014」パフォーマンスプログラムディレクター

Q2 組織の具体的な仕事内容を教えてください。

株式会社PRECOG

アーティストやカンパニーのマネジメント・プロデュースを手がけています。国内での活動では十分な収益をあげられないのが現状。国際共同製作の海外ツアーをすることで経営を安定させています。

NPO法人ドリフターズ・インターナショナル産業、まちづくり、芸術領域を横断しながら新たなビジョンを掲げ、企画制作しています。各理事の関連法人と人的なリソースをシェアしながら資金繰りを工夫するなどして運営。新しいコンセプトの文化施設の運営に携わりたいと考えています。

Q3 今後の課題について教えてください。

舞台芸術は“消えもの”なので、映像などで未来にどう残し伝えるかが課題。新しい表現のための環境や文化事業としての「日本モデル」をどうつくっていくか、常日頃考えています。

なかむらあかね

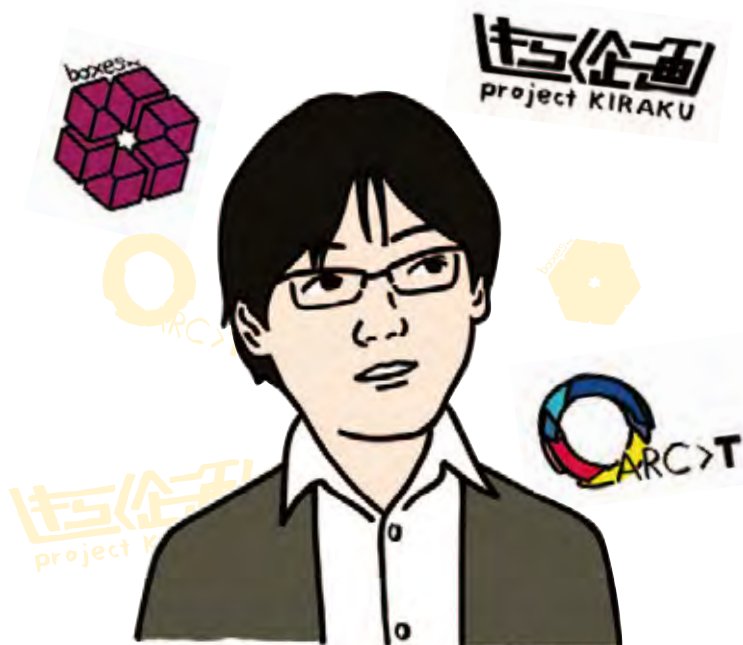
1979年東京生まれ。日本大学芸術学部在籍中より舞台芸術に関わる。吾妻橋ダンスクロッシング、チェルフィッチュ、ニプロール、ミクニヤナイハラプロジェクト、康本雅子などの国内外の活動をプロデュース。

Case 5

boxes Inc.代表

鈴木拓さんの“仕事”

Taku Suzuki



わたしの“仕事”は、

現場の人・コト・モノの動きを
マネジメントすること！

仙台を拠点に、舞台芸術の公演企画制作を行う会社の代表をしています。現場での肩書きは役割によってさまざま。舞台監督としては企画をかたちにする役目。下調べ、調整、段取りなどの実務を担います。現場が最大限の能力を発揮できる場をつくるのが仕事です。

Q1 boxes Inc.を設立した経緯を教えてください。

東日本大震災で県内の全劇場が一時閉館。仕事場を失った翌年、被災の現場と作家をつなぎ、地方芸術の活性化を目的に設立しました。

Q2 これまでの職歴を教えてください。

演劇企画チームの設立、舞台監督、プロデューサー、演劇スペースの運営など、演劇に関わるさまざまなことに携わっています。

2000 演劇企画集団-きらく企画-設立

2006 宮城県仙台市で演劇専用空間

「Gallery One LIFE」を運営

長く公演ができる場を自分たちでつくる [-2009]

2008 杜の都の演劇祭プロジェクト参加

2010 同プロデューサー就任

2011 東日本大震災を機に「Art Revival

Connection TOHOKU」設立

2012 「boxes Inc.」設立、同代表

Q3 現場を運営する上で、欠かせないことは何ですか？

「何をすべきか」より「何がしたいか」を的確に伝えること。そしてスタッフを信頼し任せること。リスクマネジメントも重要です！例えば、現場では以下のことを考えています。

- ① チームでプロジェクトのゴールを共有。
- ② 現場の人の動きをタイムテーブルで確認。誰が、どういう順番で動くかを綿密に考える。
- ③ 来場者の体験をイメージする。いつも考えるのは、ディズニーランドのおもてなし。その経験に必要な人員配置とセットで動き方をシミュレーションする。

すずき・たく

宮城県仙台市出身。震災で失われた文化・芸術の再生を目的とする組織「Art tRevival Connection TOHOKU」事務局長。「boxes Inc.」代表。震災後に生まれたつながりを有機的に継続していくため活動中。

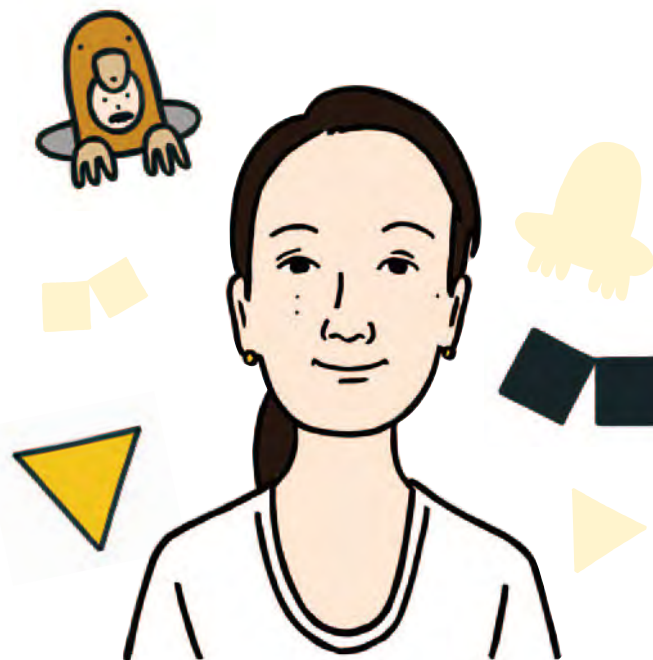
※10/5の講義をもとに作成

Case 6

株式会社アートフロントギャラリー

大木彩子さんの“仕事”

Ayako Oki



わたしの“仕事”は、

作品を一番良い状態で
展示すること！

各地の芸術祭で、作品制作・設置・撤去に関わる一連の交渉・調整を担当。アーティストの伴走者として互いに相談し合いながら、設置場所の環境を読み取り、適切な方法でプロジェクトを進めることを心がけています。関係各所への説明や申請、関係づくりも仕事の一環です。

Q1 これまでの職歴を教えてください。

「大地の芸術祭」でこへい隊として参加していました。出版社に勤務しながら越後妻有へ通い、作品制作を担当していた時期もあります。

2001 「大地の芸術祭」に参加

2007 株式会社アートフロントギャラリー入社以降、「越後妻有」の現地スタッフ

Q2 必要/あると良いと思うスキル・知識は何ですか？

運転免許、作品を扱う知識、地域の歴史、語学、画像編集ソフト、建築・大工の技術、電気、照明、編集・文t 旅行業関連など。専門知識がなくても、業者や作家と相談する際に話ができる基礎知識や得意ジャンルを身につけていく姿勢が重要です。

Q3 プロジェクトの具体的な仕事内容を教えてください。

私が担当した「中房総国際芸術祭 いちはらアート×ミックス」出品作品の開発好明《もぐらTV》は、もぐらに扮した作家本人が、毎日畑の下の地下スタジオから映像配信をするというもの。完成に至る作業の中で、一番大変だったのは場所探しでした。使える場所がなく、もぐらがいかに住んでいそうな畑や空地は、どれも農振法により、時間的に使用不可能。ようやく見つかった会場となる場所は、何もない小学校跡地でした。近くの畑を耕すお年寄りから早く育つ品種や畝づくりを習い、地元の古材を活用して前からそこにあったかのような畑づくりをしました。作家・工事業者・建築家と安全性の検討もしました。

おおき・あやこ

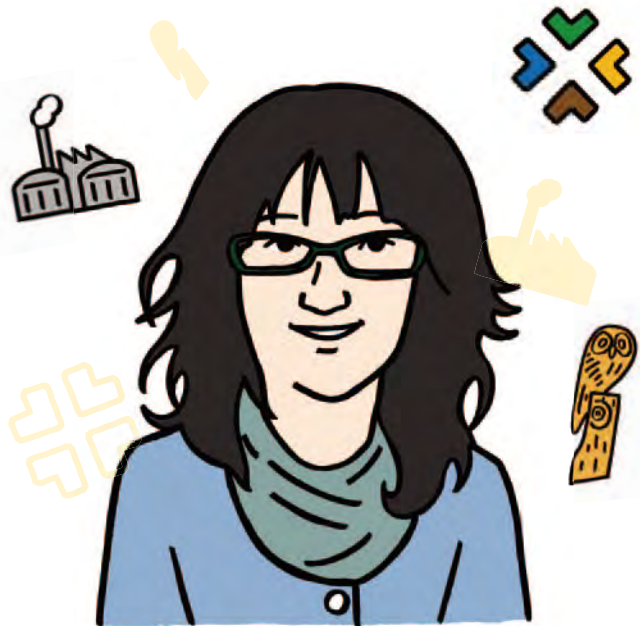
2001年から「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に関わり、2007年から株式会社アートフロントギャラリーに入社。「瀬戸内国際芸術祭2013」や「中房総国際芸術祭 いちはらアート×ミックス2014」にて作品担当を務める。

※11/9の講義をもとに作成

Case
7八戸市まちづくり文化スポーツ観光部
芸術環境創造専門員

大澤苑美さんの“仕事”

Sonomi Osawa



わたしの“仕事”は、

芸術分野の専門員として、
企画立案・調整などを行うこと！

青森県八戸市の職員として、アートによるまちづくりを推進しています。担当部署によるアートプロジェクトの全体統括という立場で、企画立案・交渉・調整・予算管理・アーティストたちのアテンド・広報のとりまとめ、各所への助言などを行っています。

Q1 仕事をする上での重要なポイントを教えてください。

企画立案だけでなく、緊急時の対応や、ときには自分で工具を片手に作品のメンテナンスも行うため、“現場にいること”です。

- ①プロジェクトを企て、仕立て、段取りを組み、実現させる。
- ②進行や各自の業務内容を落とし込んだ運営マニュアルを作成し関係者と共有する。
- ③交流会や打ち上げは参加者のケアをしつつ、最後は「ここまで～」と締める。

Q2 これまでの職歴を教えてください。

取手時代は、児童画展の企画や財務を担当。財団法人地域創造では地方公共ホールへアーティストや専門家を派遣し、ホールが実施するアウトリーチや公演を支援するダンス事業に携っていました。

2004 取手アートプロジェクト運営スタッフ

2008 財団法人地域創造に勤務

「公共ホール現代ダンス活性化事業」
担当

2011 八戸市まちづくり文化スポーツ観光部
芸術環境創造専門員

Q3 今後の課題と、その対策について教えてください。

1人でプロジェクトをこなしてしまうと、何でもできる人、やってくれる人と思われてしまいがち。「あの人はできるから……」と“ひとりアートプロジェクト”にならないためにも、日頃から周囲を巻き込む仕組みづくりを考えています。難しい課題ですね。

おおさわ・そのみ

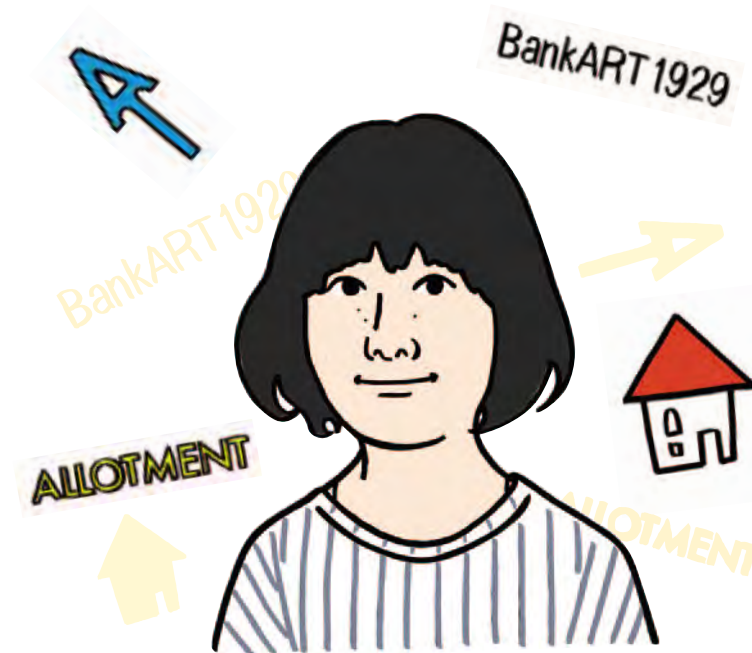
1983年生まれ。コンテンポラリーダンスを軸に、地域の資源や人を巻き込んで行う「南郷アートプロジェクト」、八戸の工場とアートを組み合わせて魅力の発信をする「八戸工場大学」などの企画運営を行っている。

Case
8

アートコーディネーター

吉田有里さんの“仕事”

Yuri Yoshida



わたしの“仕事”は、

まちでアートを展開するため
地域との関係をつくること！

名古屋市のまちづくり団体「港まちづくり協議会」で名古屋港周辺地域にアートプロジェクトを立ち上げるため、地域行事への参加や歴史調査、空き家のリサーチ、拠点づくりなどさまざまな活動を行い、実現に向け奔走中です。

Q1 どのような組織体制で運営していますか？

「協議会」という形態で、港まちのまちづくりを行っています。協議会委員が12名、常勤の事務局スタッフは6名です。アートやクリエイティブな視点を取り入れた計画を実践するため、アート担当として事務局で働いています。

Q2 これまでの職歴を教えてください。

オルタナティブスペースの企画を経て、最近では「あいちトリエンナーレ」に携わりました。

2004 「BankART 1929」(横浜)スタッフ[-2009]

2005 芦立さやかとともにユニットスペース

「YOSHIDATE HOUSE」(横浜)運営
[-2006]

2009 「あいちトリエンナーレ」アシスタント

キュレーターとして長者町エリア担当
[-2013]

2014 名古屋にて「港まちづくり協議会」
事務局員としてアートプロジェクトを
進行中Q3 アートプロジェクト立ち上げには
どんな準備が必要ですか？

アーティストと一緒にまちを歩き、そのまちの魅力を探します。アーティストのプランを実現させるために、媒介者となり、地域とアートをつなぐ役目をしています。日頃から地元の人との交流を深めています。

- ①地域のインフラを確認
(空き家、環境、歴史の調査など)
- ②地域行事に参加するなど、地元の方々との交流
- ③プロジェクトチームの組織形成
- ④まちの特性をアーティストと調査
- ⑤まちの人やアーティストが集える拠点づくり
- ⑥地域内外への持続的な広報活動

よしだ・ゆり

1982年東京都生まれ。名古屋を拠点に「港まちづくり協議会」事務局員、「ALLOTMENT」事務局スタッフとして活動している。

<http://www.allotment.jp/>
<http://www.minnatomachi.jp/>

02

思考を深める 想像を広げる

「なぜ、アートプロジェクトを行う必要があるのか？」

ゲストとの対話を通し、社会的課題・多様な視点を深める授業。

アート活動の実践者だけでなく、社会学者、人類学者など多彩なバックグラウンドを持ったゲストを招聘し、それぞれのプロジェクトの事例紹介にとどまらず、社会的な意義や役割についても複数の視点から議論が広がった。常に変化するプロジェクトの状況に対して、思考停止に陥らず、今ある課題を考える力や想像できる力、新たなプロジェクトを構想する力の修得を目指したプログラム。

Report 1

DATE
2014
7.6 (日)

GUEST
安岐理加
美術家／てしまのまど代表／
元路地と人メンバー

GUEST
蛇谷りえ
うかぶLLC

GUEST
渡邊太
社会学者

MODERATOR
吉澤弥生
共立女子大学文芸学部
専任講師

“生活”と“仕事”と“表現”の境界を生きること

「従来の“アート”という言葉から想像するものを、今回のゲストの話を書くことで打ち砕かれてしまおうだろう。」

本シリーズ初回は、モデレーターを務めた社会学者の吉澤弥生の、この言葉からはじまった。ゲストは吉澤も旧知の仲だという安岐理加、蛇谷りえ、渡邊太の3名。

まず、美術家の安岐は作品をつくることに対する自らの態度の変化を語った。最初のきっかけは、静岡県立美術館の「展示室外」での展示経験だという。観客の反応から、それまで当然だと思っていた作品制作の意義を考えはじめる。そしてレジデンスで訪れた王余魚沢では、地域で「生きていくための労働」をする人々の姿に出会う。自らの作品制作という仕事が「なんだか回りくどいことをしているような気持ち」になったという。現在は瀬戸内国際芸術祭をきっかけに家族とゆかりがある香川県の豊島に移り住み、「てしまのまど」というスペースを運営し、その土地と向き合い、何かをつくることと自分の生活とが響き合うことを大事にしている。

2人目のゲスト、蛇谷は鳥取でゲストハウスとカフェとシェアハウスが一体となった「たみ」を運営している。大阪生まれでデザインの専門学校を卒業し、働きながら土日を観客として過ごす生活から、アートの現場で働くことに。その後、フリーランスとして働き方を考える中で「自分でやってみよう」と友人2人と岡山の元旅館を使って宿泊、滞在、イベントができるスペース「かじこ」の運営を行う。2010年、瀬戸内国際芸術祭の開催時期

に期間限定で「誰が来ても使える場」として開いた「かじこ」の実践は「たみ」へとつながっていった。

そして3人目のゲスト、社会学者の渡邊は「大淀南借家太陽2」と「コモンズ大学」という場の運営経験から、いかに家賃を確保するか、つまり独立した資本をいかに獲得するかを課題として提示した。そして「自律」のあり方として、国家からの政治的自律、資本からの経済的自律、支配的な文化からの文化的自律という3つの考え方を語る。最後に渡邊は、今ある資本主義の形をどう変えていくのか、と問いかけ、その回答を見出すための可能性として「民俗学的な想像力」という言葉を投げかけた。

話しぶりは三者三様。3名のゲストの生き方や実感から発せられる言葉は、受講生が前提として持つ価値観を問うものとなった。ディスカッションでは、ゲストそれぞれの「アート」との距離感について議論も行われた。吉澤は3人の実践を「日々の営みと表現の際」にあるところがおもしろいと語り、セッションは締めくくられた。

(文・佐藤李青 [スクールマネージャー])



Report
2

DATE
2014
7.20 (日)

GUEST
藤浩志
美術家
十和田市現代美術館長

GUEST
新雅史
社会学者

MODERATOR
佐藤慎也
日本大学准教授
建築家

アートプロジェクトは地域社会をどう読み込むか？

この日3331 Arts Chiyodaで開催されていた、藤浩志の代表的プロジェクト「かえっこバザール」を見学するところから授業はスタート。藤は「かえっこ」について、「システムとツールだけをつくった結果、出来上がった空間。僕は何もつくっていないとも言える」と紹介する。はじめにモデレーターの佐藤慎也は、社会に関わるプロジェクト型の表現に至った藤のこれまでの活動に切り込んだ。学生時代、鯉のぼりを鴨川に「展示」した経験を持つ藤は、まちに出れば法律があり、場の所有者がいて、ルールがあることを、身をもって体験したという。白いキャンバスに描くより、閉じられたホワイトキューブで発表するよりも、「場の属性を読み解いて、まちの中で活動をした方がおもしろい」と藤は語る。

社会学を専門とする新雅史は、藤の話に呼応しながらいくつかの問題提起を行った。郊外のショッピングモールなどを例に、これまでの日本の都市計画は伝統や生活様式といった「場の属性」を読み込まず、「白紙状態」からまちをつくってきたのではないかと語る。東日本大震災後の



再生計画も同様だ。また数値的なデータから、日本の商店街の現状を分析し、美容院や飲食店など“縁”でつながる業態が経営を保っていること、日本の住宅がパブリックから隔離されプライベートな空間になったことで、独居老人などの生活のリスクが高まっていることを指摘。日本古来の長屋のあり方に触れながら、「生活の中の共同の場」の必要性を提示した。そして現代の住宅や経済のシステム、人々が生活の中で担う役割を“変える”視点が求められているのではないかと、アートの手法に期待を込めた。

これに対して藤は地域社会におけるプロジェクトと、アートの違いについて、発注されて行う仕事と、自分で手を動かしてつくるプロセスの違いを挙げた。「商店街」を、モノを売る以外の機能に転換する発想など、既成概念にとらわれず別の価値観を持ち込める可能性がアートプロジェクトにはある。これからのアートプロジェクトでは、地域社会をどう読み込み、誰とやるかがキーになる。そして既に見えている課題ではなく、表面化していないモヤモヤとした問題にどうアプローチし、どう言語化していくのか。そこに到達できるアートを考えていると藤は語った。新も、地域にコミットする際には客観性を捨てて、誰かの立場に立って話を聞く姿勢を大切にしていると話す。ここでの議論は答えが出るものではなく、受講生それぞれがこれから現場に入っていく際にヒントとして思い出してもらいたいと佐藤が結び、議論の続きは現場での実践に持ち越された。

(文・及位友美[スクールマネージャー])

Report
3

DATE
2014
8.24 (日)

GUEST
鈴木謙介
関西学院大学
社会学部准教授

GUEST
北澤潤
現代美術家
北澤潤八雲事務所代表

MODERATOR
長島確
ドラマトゥルク
翻訳家

「もうひとつ」の関係とコミュニケーションを考える

「アートプロジェクトを、どのような言葉で語っていくのか」、モデレーターの長島確はセッションの冒頭で自身の問題意識を語った。その言葉には、作品をつくるプロセスで使い捨てていく言葉、これから出来上がりつつあるものを外に向けて語る言葉の2種類があるという。そして、ゲスト紹介に加え、北澤潤には、作家として、どんな言葉でプロジェクトをつくっているのか、また社会学者の鈴木謙介には、アートプロジェクトを、ひとつのコミュニティやコミュニケーションのかたちにとらえることから、どんな言葉を使えるのかという点を知りたいとづけ、議論がスタートした。

まず北澤が、自ら仕掛けてきたアートプロジェクトを紹介した。商店街の空き店舗を物々交換により居間へと変貌させる「リビングルーム」、仮設住宅に1日限りのまちをつくる「マイタウンマーケット」など、“もうひとつの日常”をつくる実践が語られる。社会的につくられた日常ではなく、“もうひとつの日常”を地域の人々と主体的につくること。何かを仕掛けるのではなく、想いが出てくるまでの時間を共有すること。その手法を北澤は“待つコミュニケーション”と表現する。この実践を通して、小さな共同体を地域の人たちとともにつくっていき、最終的には持続可能な在り方を目指すとして語る。

次に、鈴木は大学での授業風景の変化から語りはじめた。学生はネットにつながった端末を持つことで、同じ教室という場を共有しつつも、外の世界とつながることができてしまう。その場での会話より、その「情報の穴」を経由したコミュ



ニケーションが優先されてしまうのだ。それに対して、鈴木は「この場にいる」という共通の意識や認識を生み出すための仕掛けとしてアーキテクチャーデザイン、コンテクストデザイン、コミュニケーションデザインという3つの考え方を提示。具体的な場所、行動の文脈、身体的な所作と言い換えられる、これらの考え方をともに、数々の実践を紹介。最後に大学の共同学習の場づくりを例に、将来的にはその場が自律的にまわっていくことが理想的だと締めくくった。

北澤は鈴木の考えに共感し、プロジェクトの現場が社会的に曖昧な機能を持つがゆえに、現実の場所で自然発生的に多様な出来事が起こると話す。鈴木は、それが一方でメインストリームから距離感がある人の“アジュール”になりうることを指摘。長島は、そのような場の現代社会での必要性を指摘し、そこが2人の議論の共通点であったとふりかえった。それぞれ異なる実践を、異なる言葉で語りながらも、登壇者の3人が相互に共感し合うセッションとなった。

(文・佐藤李青[スクールマネージャー])

Report
4

DATE
2014
11.9 (日)

GUEST
青木淳
建築家

GUEST
会田大也
ミュージアムエディター/
東京大学GCL育成プログラム
特任助教

MODERATOR
渡辺ゆうか
FabLabKamakura,LLC 代表
慶應義塾大学SFC研究所
訪問研究員

創造性を引き出すプラットフォームとしての場と自治



この回では、ゲストとモデレーターの垣根なく事例紹介と議論が行われた。

渡辺からは、自らが携わるFabLab Kamakura (鎌倉)をはじめとした、3Dプリンタ・レーザーカッターなどデジタル工作を行うことのできるFabLabの活用事例が紹介された。鎌倉では蔵の一部を活用して工房を運営。コミュニティラボを掲げて、ルールづくりを工夫する、朝の時間帯に掃除をした方が2時間工房を使える「朝ファブ」という活動の仕組みをつくるなどすることで、自治的に場が運営されるようになったと言う。

会田からは、山口情報芸術センター (YCAM) で教育普及に携わっていた際に担当した「コロガル公園」の事例が話題となった。スケボーパークのような床面のある大空間に、マイクやスピーカー、LED照明のようなメディアが埋め込まれていて、遊びを生み出す環境をつくりだす。運営面ではルールや使い方、遊び方を使う人が考えていくことで禁止事項をできるだけ減らし、不測の事態に対してはプレイリーダーが中心になって柔軟に対応する。「子ども遊び場ミーティング」

という公式な会議の場も設けて、新しい機能を実装する試みも行われ、子どもの署名活動により予定期間終了後に復活するところまで支持された。

渡辺は、青木の著書『原っぱと遊園地』でも挙げられている「場の質」を担保するにあたって必要なのは、参加者の心構え、それを醸成するためのルール、そして時間 (コロガル公園は3ヶ月、朝ファブは1年)ではないかと述べ、青木が関わる現場の事例も求める。

青木も、自治が生まれるためには時間というファクターが大きいと回答。新潟県十日町市のプロジェクトに携わる中で、現地の事務所拠点「十日町分室」が市民と対話するための役所の分室になり、市民活動の分室にもなっている事例を持ち出し、そこにはやはりルールや自治ができてくるが、公的なものが自治的になっていくこと、それを計画するのは難しいことだとも語る。

プラットフォームとしての場をどのように発展させていくのか。それをイメージするのかしないのか。コントロールの支配下に置くのか置かないのか。場に関わる人の意識が重要で、そこに必要なメンタリティをみんなで習得していくこと、コンテンツを教えるのではなく、学び方を伝えること (WhatではなくてHow)。ものをつくる、遊びをつくる体験の豊かさ、創造性は観察力・思考力・行動力を鍛える、何も無い場ではなく原っぱのように何かはある場をどう楽しむのか、まで話は広がった。

(文・橋本誠 [スクールマネージャー])

Report
5

DATE
2014
12.14 (日)

GUEST
木村大治
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科
教授

GUEST
久保田翠
NPO法人
クリエイティブサポートレッツ
理事長

MODERATOR
石幡愛
としまアートステーション構想事務局長
一般社団法人オノコロ

いかにして人々は共にあるのか——共在をめぐる対話から

“多様な人々が共に在ること”について、障害福祉の現場やアフリカの人々などの研究事例を踏まえながら議論が進められた。モデレーターを務める石幡は、アートプロジェクトの現場において、ある種の平和的イメージを肯定する風潮 (つまり、“老若男女が和気あいあいとすること”や、“みんなで一致団結してことを成し遂げること”をよしとすること)に対する自身の違和感を例に挙げ、それに関連してニコラ・ブリー、クレー・ビショップのリレーショナルアートに関する理論に触れながら口火を切った。

つづいて久保田からは、障害者と健常者、障害者と社会が、どのように“共に在ること”ができるのかを探求してきた事例が紹介された。そのひとつに、重度の知的障害を持つ久保田の息子・壮を基準に据えてつくられた公共文化プロジェクト「たけし文化センター」がある。個人の持つ文化を尊重し、追い出すのではなく、“どんなことでも受け入れる”という前提条件のもと開かれた公共の場は、結果として多様な人が、それぞれの方法でその場にいるということを可能にしている。プレゼンテーションの最後には、障害福祉施設「アルス・ノヴァ」の利用者の1人である太田くんの、ゆっくりと時間をかけて階段を降りる姿をおさめた10分程の映像が紹介された。利用者たちの自分なりの価値観や時間軸に寄り添いながら、それをじっくり観察し、待ちながら、ともに過ごすスタッフや施設の様子を伺うことができた。

対して、人類学を専門とする木村は、“共生”や“共存”、“ふれあい”という言葉には嘘臭さを感じ

ているということから話を切り出した。ある意味“関係性を切断していたり、いがみ合ったりしていても、一緒に存在している状態”が現実であるといい、“共在”という言葉を提唱する。誰もまともに聞いていないのに、堂々と喋り続ける投擲的発言を日常的にしているコンゴ民主共和国のボンガンドの事例は、言葉のキャッチボールをすることが美しいとされる常識に対して、そうではないコミュニケーションもあることを提示する。三者の会話が途切れた際には、「ビッグミーは、話が途切れてしまっても気にせず沈黙が何分も続くという奇妙な現象が起きます」と、異なる文化における価値観の違いも話題となった。また木村は「平等」という概念への違和感を、「対等」という概念を対置させることにより示した。

久保田や木村から投げかけられるさまざまな問いかけを受け、受講生たちは自分たちの持つ価値観を揺さぶられながら、それぞれの思考を深めていくセッションとなった。

(文・坂本有理 [スクールマネージャー])



Report
6

DATE
2015
1.18 (日)

GUEST
遠藤水城
インディペンデント・
キュレーター

GUEST
齋藤純一
早稲田大学
政治経済学術院教授

MODERATOR
毛利嘉孝
社会学者
東京藝術大学准教授

アートが生み出す公共性や価値とは何か

「行政がアーティストをサポートするということは、どのようなことなのか。」アーティストのよろず相談などを担うHAPS (東山アーティスト・ブレインメント・サービス) 実行委員長を務める遠藤の問いかけから議論がはじまった。「アートの概念は拡張をたどっており、最近増えてきているのがプロジェクト型のアート。そのときに、アーティスト活動と認識して活動してきた人と、広く文化的な活動ととらえてきた人も、ともに“アート”のカテゴリーに入る可能性がある。それらを切り分けることは可能かという問題が発生する。HAPSは、最終的な理念として、一人ひとりがクリエイティビティを持っているならばすべて肯定されるべきであり、そのベーシックインカムを担えれば良いと考えている」と遠藤は語る。

齋藤は、ハンナ・アレントの言葉を借りて公共的なものと共同的なものとの違いを整理しつつ、「それぞれに異なる人々の言葉や行為、今日の文脈で言えば表現された作品によって他者が出会う、ミーティングプレイスこそが公共であり価値だ」と応答した。その一方で、「人と人のつながりが形成されていくリレーショナルアートがコミュニティ再生のために行われている状況は決して悪くはない。しかし、それがある種の内部最適化になっていないだろうか、ということをおアートの側からも問う必要があると思う。埋め合わせだけの社会関係だけがつくられていて、それが必ずしも制度的な関係を問い直す回路につながっていない、と感じている」と問題提起を行った。これに対して毛利も、「ヨコハマトリエンナー

レ2014」における釜ヶ崎芸術大学の取り組みを評価しつつ、実際に釜ヶ崎をはじめとするドヤ街のような場と芸術祭をきちんとつなぐ制度がない点などを具体例として持ち出す。

話題はさらに宮下公園問題などにも広がり、「部分から全体を顧みることが美術や美術批評の機能。具体的なケースを扱いながら、それについて考える機会を提供してほしい」と齋藤。また「美術館などが扱えればいいのだけでも、税金を払っている人の理解を得ることができないとされてしまうのが現実」と毛利が指摘した。さらに遠藤が「公共性の高い芸術は税金を使わなくても成立しうる。税金で明らかに社会に役立つ福祉や教育ではなく、美術や芸術をやりますよ、と言ったときに、アートは有用性とは全然違う何かを導入しないといけない」と語り、「公共性」をテーマに激しい議論が展開された。

(文・橋本誠 [スクールマネージャー])



ゲストプロフィール [五十音順]

会田大也 あいだ・だいや

[ミュージアムエデュケーター]
東京大学GCL育成プログラム特任助教
山口情報芸術センター [YCAM] にて、開館当初より教育普及担当を務める(2003-2013年度)。担当企画展示「コガールパビリオン」は第17回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品受賞。2014年より東京大学ソーシャルICTグローバル・クリエイティブリーダー [GCL] 育成プログラム特任助教。

青木淳 あおき・じゅん

[建築家]
1956年横浜生まれ。1982年東京大学大学院修了後、磯崎新アトリエに勤務。1991年、青木淳建築計画事務所設立。個人住宅、公共建築から商業建築まで多方面で活躍。2004年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。代表作に、「馬見原橋」、「青森県立美術館」等。著書『原っぱと遊園地』(2004、王国社)他。

安岐理加 あき・りか

[美術家/てしまのまど代表/元路地と人メンバー]
道を歩いたり、人と話したりする対話から見えてくる土地と人の関係性に視点を注ぎ、表現活動を行う。2010年から3年間オルタナティブスペース「路地と人」の運営に携わる。2012年より瀬戸内海の豊島にて「てしまのまど」を設立、オーラルヒストリーの収集と記録やワークショップの開催等を中心に活動する。

新雅史 あらた・まさひこ

[社会学者]
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学(社会学)。専攻は産業社会学・スポーツ社会学。現在、学習院大学大学院ほかで非常勤講師を務める。東京大学大塚町・仮設まちづくり支援チームのメンバーとしても活動。著書に「商店街はなぜ滅びるのか—社会・政治・経済史から探る再生の道」(2012、光文社新書)など。

石幡愛 いしはた・あい

[としまアートステーション構想事務局長/一般社団法人オノコロ]
1984年福島県生まれ。2014年東京大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。プロジェクト評価に関心をもち、プロジェクトの進行過程そのものに評価的な視点や手法を埋め込む方法を探っている。2012年-NPO法人クリエイティブサポートレッツ事務局、2014年-としまアートステーション構想事務局長。

遠藤水城 えんどう・みずき

[インディペンデント・キュレーター]
2005年、若手キュレーターに贈られる国際賞「Lorenzo Bonaldi Art Prize」を受賞。2007年-2010年までARCUS Projectディレクターを務める。現在、「東山アーティスト・ブレインメント・サービス」エグゼクティブ・ディレクター、「国東半島アートプロジェクト」レジデンス・ディレクター。

北澤潤 きたざわ・じゅん

[現代美術家/北澤潤八雲事務所代表]
行政機関、教育機関、医療機関、企業、地域団体、NPOなどと協働し、国内外各地で人々の生活に寄り添うアートプロジェクトを企画。日常性に問いを投げかける場を地域の中に開拓する独自の手法によって、社会に創造的なコミュニティが生まれるきっかけづくりに取り組む。代表作に《リビングルーム》《サンセルフホテル》など。
<http://www.junkitazawa.com>

木村大治 きむら・だいじ

[人類学者]
1960年愛媛県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。専門は人類学、コミュニケーション論。著書に『共感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』(2003、京都大学学術出版会)『括弧の意味論』(2011、NTT出版)など。

久保田翠 くぼた・みどり

[NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長]
1962年生まれ。静岡県浜松市在住。障害のある長男の出産を機に、2000年にクリエイティブサポートレッツ設立。2004年NPO法人化。2008年より、個人のやりたいことをアートの手法でサポートするたけし文化センター事業をスタート。2010年障害福祉施設アルスノヴァを設立。2014年認定NPO法人取得予定。
<http://cslets.net>

齋藤純一 さいとう・じゅんいち

[早稲田大学政治経済学術院教授]
政治理論・政治思想専攻。著書に『公共性』(2000、岩波書店)『自由』(2005、岩波書店)『政治と複数性』(2008、岩波書店)など。近年は、政治における感情の作用、デモクラシーにおける理性と意志などに関心を持っている。

佐藤慎也 さとう・しんや

[日本大学准教授/建築家]
1968年東京都生まれ。建築に留まらず、美術、演劇作品制作にも参加。「3331 Arts Chiyoda」改修設計(2010)、『墨田区/豊島区/三宅島/淡路島在住アトレス家』ドラマトゥルク(長島確演出、2010-13)、『としまアートステーション構想』アドバイザー(2011-)など。

蛇谷りえ じゃたに・りえ

[うかぶLLC]
1984年大阪生まれ。2012年に「うかぶLLC」を三宅航太郎と共同で設立し、鳥取県にて複合型の滞在スペース「たみ」を開業。その他、県内外での印刷媒体を中心としたデザイン企画および制作、アートやメディアに関するコーディネート、マネジメント業を務める。

鈴木謙介 すずき・けんすけ

[関西学院大学社会学部准教授]
1976年福岡県生まれ。関西学院大学准教授。専攻は理論社会学。「暴走するインターネット」(2002、イーストプレス)以来、情報化社会の事例研究と、政治哲学を中心とした理論的研究を架橋させながら、独自の社会理論を展開。「カーニヴァル化する社会」(2005、講談社)以降は、不安定を強いられる若者たちの感覚をベースにした議論も増えている。

長島確 ながしま・かく

[ドラマトゥルク/翻訳家]
日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。「アトレス家」シリーズや「つくりかた研究所」など、劇場外でのプロジェクトにも積極的に関与。一般社団法人ミクストメディア・プロダクト(mmp)代表理事。東京藝術大学、立教大学ほか講師。

藤浩志 ふじ・ひろし

[美術家/十和田市現代美術館館長/秋田公立美術大学教授]
1960年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学院修了。主な作品に《101匹のヤセ犬の散歩》。1ヶ月分の給料のお米からはじまった《お米のカエル物語》。家庭廃材を利用した《Vinyl Plastics Connection》《Kaekko》《Kaeru System》。架空のキーパーソンをつくる《藤島八十郎をつくる》など。
<http://geco.jp/>

毛利嘉孝 もうり・よしとか

[社会学者/東京藝術大学准教授]
専門は社会学・文化研究。特にメディアや文化と政治の関係を考察している。京都大学経済学部卒。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ MA (メディア&コミュニケーションズ)、同PhD(社会学)。九州大学大学院助手・助教授を経て現職。主著に『文化=政治:グローバリゼーション時代の空間の叛乱』(2003、月曜社)など。

吉澤弥生 よしざわ・やよい

[共立女子大学文芸学部専任講師]
NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト [recip] 代表理事/NPO法人アートNPOリンク理事。1972年生まれ。大阪大学大学院修了、博士(人間科学)。専門は芸術社会学。労働、政策、運動、地域の視座から現代芸術を研究。単著『芸術は社会を変えるか?—文化生産の社会学からの接近』(2011、青弓社)など。

渡邊太 わたなべ・ふとし

[社会学者]
1974年生まれ。大阪府出身。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。2012年から大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科専任講師。専門は文化研究・宗教社会学。国際脱落者組合 (International NEET Union) 組合員。著書に『愛とユーモアの社会運動論』(2012、北大路書房)。

渡辺ゆうか わたなべ・ゆうか

[FabLabKamakura, LLC 代表
慶應義塾大学SFC研究所訪問研究員]
多摩美術大学環境デザイン学科卒業後、都市計画、デザイン事務所を経て、2010年ファブラボジャパンに参加。2011年5月、ファブラボ鎌倉を田中浩也氏と共同設立、2012年にFabLabKamakura, LLC を立ち上げ代表をつとめる。21世紀型の創造的学習環境の構築に向けて活動する。

情報収集力を身につける

03

インプットなくして、アートプロジェクトというアウトプットは生まれえない。
アートプロジェクトに必要な情報収集術・活用術について学ぶ授業。

アートプロジェクトを仕掛ける人たちは、常日頃からニュースや書籍、作品などからたくさんの情報を取り込み、それらを整理してアーカイブし、使いたいときに情報を取り出して自らのプロジェクトに活用している。そんなインプット力に長けたゲストを招き、アートプロジェクトを動かすときに必要な情報収集術、活用術について学ぶことを狙いとしたプログラム。

DATE
2014
7.20 (日)

GUEST
アサダワタル
日常編集家

Report
01

文筆、音楽、アートプロジェクトを通じて、福祉や地域や住宅政策、働き方など、さまざまな領域で新しいコミュニケーションの有り様を創作している。



アサダさんの情報収集術

01 | あらゆる日常を素材としてとらえる

- 日常生活を素材としてインプットする
- 会話／歌／友人の歌／飲み屋の会話などさまざまな素材を等価に並べる
- 日々の気づきは、場合によっては表現媒体にまとめていく

02 | 消費と生産を対置しない

- 作曲や演奏にこだわらず、聞くということに関心がある
- 書くことより、読むことで何が出来るかということに関心がある
- 「生産している」という観点に立たず、「消費もしている」という当然の立場として、インプットを受容すると世界の見え方が変わる

03 | アウトプットにとらわれない

- 日常生活とアウトプットの間にある、表現未満を意識する
- アウトプットすることを意識しすぎると、インプット・日常への解像度が下がってしまう
- 表現未満で構わないから日常の素材を受容する姿勢を持つ



アサダワタル流
インプット術

日常には表現の種があふれています。自然すぎてあまり認識されない些細な行為や出来事を再整理し、取捨選択し、再構成することによって現れるコミュニケーションそのものを、できるだけモノ的な媒体に落とし込まず、コト的な媒体(=アートプロジェクト)にまとめ上げることが大切です。

DATE
2014
12.14 (日)

GUEST
長島 確
ドラマツルク／翻訳家

Report
02

ドラマツルク＝演出家・振付家・アーティストの作品制作上のパートナーとして活動。この10年間で30数本の作品に関わる。



長島さんの情報収集術

01 | ニュース情報をクリッピングする

- RSSリーダーを利用し、日々情報を収集。コピーし、クラウドサービスに蓄積
- 収集した情報をチームメンバーと共有。多くの情報をインプットし続ける
- 継続しないと意味がない。継続するほどバックグラウンドの蓄積ができる

02 | 本と映画(DVD)は手元に置いておく

- できるだけ、頑張って購入する。そうすることで視点や感覚を共有したい人に貸し出すことができる
- 本は、アイデアの宝庫。映画は、作品の構造を考えるヒントになる

03 | 自分の身体に入れる、なじませる、コンディションをつくる

- 情報と身体を結びつける道具(文具など)にこだわる
- 時間をかけて身体に情報を入れ、なおかつ情報源を自分の近くに置いておく



長島 確流
インプット術

「情報の入れ方は芋づる式」です。水平的に満遍なく集めるのではなく、何かひとつでもとっかかりを見つけ出してから、調べていく。そうやって自分の身体を使っていくうちに、情報が組織されフィルタリングされます。ゆっくりとウォーミングアップしながら、感度を上げていくことです。

現場に出会う

プロジェクトの現場は、どこにあるのか、どんな人たちが運営しているのか。
自分の足で現場を訪問し、当事者の声を聞くことで、リアルな活動に触れる授業。

都内および近郊のアートプロジェクトの現場を訪問し、関係者の方々のお話を聞いた。アートプロジェクトの「現場」は、どのような組織の中でどのようなメンバーが、日々どのように運営をしているのか。現場の空気を感じつつ、受講者それぞれが考え、感じる事ができたプログラム。

DATE
2014
8.3 (日)

GUEST
小川希
TERATOTERA チーフディレクター
Art Center Ongoing 代表

Report
01

TOUR COORDINATOR
高村瑞世 [TERATOTERA事務局長]
宮久実那 [TERATOTERA事務局]



吉祥寺のアートスペース「Art Center Ongoing」と、「TERATOTERA」の一環である「TEMPO de ART」の会場を訪問。Art Center Ongoingでは代表の小川さんに、活動の経緯や目的、この場所への想いなどをお話いただいた。西荻窪の店舗で作品を展示した公募展、TEMPO de ARTの会場も合わせて見学。当日はTERATOTERAスタッフの案内で会場のいくつかを巡り、制作の裏話を聞いた。

*JR中央線高円寺駅～吉祥寺～国分寺駅区間をメインに展開するアートプロジェクトの総称。

まちの資源を生かそうとか、このエリアのためになることをしようという発想はありませんでした。当初から、この場所で自分たちにとっておもしろいことをしていれば、自然とまちに広がっていくんじゃないかと考えていました。ボランティアスタッフのTERAKKOは、プロジェクトを支える大きな存在。関わりたい人は年々増えています。誰に頼まれたわけでもなく、楽しいから集まってくるんです。



DATE
2014
10.5 (日)

GUEST
久木元拓
一般社団法人
非営利芸術活動団体コマンドN
プロジェクトマネージャー

GUEST
宍戸遊美
3331 Arts Chiyoda
地域担当マネージャー

Report
02



「TRANS ARTS TOKYO (TAT)*」の現場を訪問する予定だったが、台風のため午後からのイベントは中止に。「現場に出会う」ことはできなかったが、プロジェクトマネージャーの久木元さんから、話題を集めたパトリシア・ピッチニーニの作品に関する裏話や構想中の「コミュニティアートセンター」のお話を聞いた。また3331 Arts Chiyodaの地域担当マネージャーの宍戸さんからは、地域のイベントに参加しながら関係性をつくることなど、開かれた施設運営の工夫について語られた。

*2012年に始動した神田エリアで展開するアートプロジェクト

現場にはトラブルがつきものですが、さまざまな事情を汲みながら対応しています。TATは「アート×産業×コミュニティ」をテーマに、アートの力で地域の価値を高めようと展開しています。(久木元)

コミッションワークに参加したアーティストたちも、この場に愛着を持ってきていて、3331に訪れたときにはオフィスに顔を出してくれるんです。区民はもちろん、誰にでも開かれた拠点を目指して活動しています。(宍戸)

後期課題 (グループワーク)

企画書を作成してプレゼンテーションをする

1年間にわたる「思考と技術と対話の学校」の授業と、毎回の課題に追われながら、仲間とともにアートプロジェクトの現場に足を運び、ボランティアにも積極的に参加してきた受講生たち。全11回の授業を通して、自分なりの気づきを言葉にし、思考と対話を重ねてきた。1年間の総決算となる後期課題は、グループを組んでの企画立案とその発表だ。学生、社会人、アートプロジェクトの現場で働いている人など、異なるバックグラウンドを持つメンバーがアイデアを出し合っ、1つの企画にまとめるプロセスはたくさんの刺激

があった。まずは今、社会に必要なアートプロジェクトとは何なのか、自分たちはどのようなことをどのような現場でやりたいのか、といった自らの立ち位置を考えること。そして異なる意見をどうやってひとつの企画に落とし込むか議論する。そんなプロセスそのものが、アートプロジェクトを実践するひとつのシミュレーションにもなった。アイデアを実現性の高い企画書に落とし込む作業の難しさも体感した。最終日の2月1日(日)には、ゲストを迎えての講評会を開催し、1年を締めくくった。

📌 課題 | 1

以下の内容を含めた企画書をグループごとに作成する。

- 本企画に至った経緯(300字以内)
- 事業の概要:事業名称、実施場所、実施期間、目的(300字以内)、事業概要(400字以内)
- 実施により期待される成果・効果(200字以内)
- 事業計画書:内容、実施スケジュール、実施体制
- 収支計画書

📌 課題 | 2

企画書の内容についてプレゼンテーションをする。
各グループ持ち時間10分間+質疑応答

COMMENTATOR

帆足亜紀

アートコーディネーター



以前TARLの講座で「運営ガイドライン」をつくった視点で言うと、みなさんは今アートプロジェクトをはじめようとしている状態です。アートプロジェクトの未来を考えたとき評価を行って、課題を解決することが目的になると、1回さりのイベントになってしまう。社会の中の価値を変えていくために持続性を持つにはどうしたらいいのか。もう一歩踏み込んで悩んでもらえると、「自分がやりたいアートって何だろう?」という考えを深められるんじゃないかと思います。

COMMENTATOR

吉田有里

アートコーディネーター



想いや考えを企画書にして人に伝えることで、情報が整理されたのではないかと思います。そしてこれから実際の企画として立ち上げていく場合は、思いもしないトラブルや効果があったりするところがおもしろい。ぜひ次のステップにつなげてもらえたら。偶然同じグループとして集まったメンバーのみなさんが、1年間思考と対話を重ねてきたのがわかりました。今日のような場があることは、みなさんにとって意味のあるものだと思います。

COMMENTATOR

森司

東京アートポイント計画ディレクター/
思考と技術と対話の学校長

みなさんは1年間で33名のゲストに何らかの形で出会ってきた。彼らが持っている一つひとつの身体的な裏付けのある言葉の強さを、改めて思い出してください。プレゼンを聞いて「思考」の部分是一定の成果が出ていると感じましたが、これから企画を身体化するためには「技術」が必要。アートプロジェクトを知らなかったみなさんが企画をつくり、その必要性を知ったことが重要です。プレゼンにはみなさんの最大限の努力が見られました。

エントリーされた企画一覧

チーム名
参加人数

企画名称

HMT8
7名

アート広報専門会社 新規事業公開会議 (シンポジウム)

アートプロジェクトの広報に関心があるメンバーが、企業の新規事業の公開会議を模したシンポジウムを企画した。アートの現場の状況・課題を考えた上で、「広報」という要素を検討するために、企業というフレームを用いる。その場で有識者のコメントを受け、会場全体でアートプロジェクトの広報についての問題提起を行うため、シンポジウムという形式をとった。

あなたのいきる
ト・コロ実行委員会
5名あなたのいきるト・コロ
~人生にアートをみかたにつけると!!!~

目に見えない【生きにくさ】×【アート】をテーマとして「境界線」について考え、アートのアプローチにより視点の転換の可能性を探るシンポジウムを企画した。ゲストスピーカーには、社会の「境界」にアートの手法でアプローチしている複数のアーティストを迎え、彼らのアートワークを切り口に、哲学者をモデレーターに立てた議論の場づくりを構想した。

traveling
7名

プロジェクト 15

個人と社会をアートでつなぐ「アートプロジェクト」を若年層が体験することで、社会の中での個人の存在、社会や他者とのつながりを実感できる機会をつくるプロジェクト。2020年の東京オリンピックの際に、外国人観光客に地域の日本文化を伝えるアートプロジェクトを、学校で友だちと一緒に展開する。自分の将来を考えはじめ、2020年に20歳を迎える15歳をターゲットとした。

Cross Border
3名

求愛プロジェクト

「職場」で働く人々を対象に、「求愛者」に扮したアーティストが、参加者に「求愛」する行為をアートプロジェクトとして企画した。アーティストが参加者の特徴をもとにラブレターを書き、ブーケをつくる。個とコミュニティ、個と社会の関係性を見つめなおす企画。

未来の雑司が谷探検隊
7名

「未来の商店街の遊び方」プロジェクト

市民それぞれが未来の商店街の遊び方について考え、実験してみるプロジェクト。未来をおもしろく想像したときに、「現状はこのままでいいのだろうか?」と問いかけが生まれるような効果を期待する。食について幅広い視野を提案するアーティストを招聘し、発想豊かな子どもの力とアーティストの力を掛け合わせ、新しい視点、機会、関係を構築していくプロジェクト。



この1年の思考・技術・対話いろいろ —受講生の声—

学校での授業以外の時間も、受講生たちはアートプロジェクトの現場を訪問したり、ミーティングで議論を交わしたり、これからのキャリアプランについて考えたりと、さまざまな活動を行ってきました。そんな受講生たちの1年の活動をご紹介します。

●この1年は、これまでのアートプロジェクトなどの活動と向かい合い、経験値にしようと考えていました。ゲストのお話を聞き、**自分なりの視点**の持ち方について考えることができました。

●藤浩志さんの「**挨拶と掃除が大事**」という言葉が印象に残っています。

授業について

第一線の現場で活躍するゲストと出会い、刺激を受け続けた1年。改めて「アートプロジェクトとは何か」と向き合い、考える時間になりました。

●後期まとめて実際に企画を考えるときに「アートプロジェクトって何?」と、ますます**モヤモヤ**しました。

●アサダワタルさんの表現未達の「弱い現れ」を大事にする、その考え方は、**アート作品の概念を覆す**ものでした。

●十和田市現代美術館のワークショップで、子どもからお年寄りまで仲良く、楽しそうに参加されていたのが印象的でした。東京から1人参加した私でもたくさんお話を伺うことができるような温かい雰囲気、美術館が地域をつなぐ役割を担っていることを目の当たりにしました。

●「千住の1010人」で、みんなが楽しそうに演奏して歩き回る姿をみて、音楽の力のすごさを感じたとともに、**アートプロジェクトの多様性と可能性**を感じました!

●いろいろな授業で話題に上がった大阪の**ココルーム**へ行き、代表の上田假奈代さんとその場にいた「おっちゃん」とお話しすることができ、芸術活動が人の人生に与える影響が大きいと実感しました。

●1人で「**国東半島芸術祭**」をまわり、たくさんの現地の方と交流を持ってました。突発的に、別の文化財を見学に行ったり、その土地の農産物をいただいたり、と地域で行う芸術祭の醍醐味を味わうことができました。

自主的な活動について

ゲストのお話をきっかけに、教室を飛び出して現場に向かった人、ボランティアに参加した人、自らプロジェクトを仕掛けてみた人——。その活動にも個性が出ました。

交流会のこと

新しい企画は交流会から生まれることも多いアートプロジェクトの現場。

授業以外にゲストや仲間と過ごす時間は、抱えていたモヤモヤを話し合う場にもなりました。

●交流会後の帰り道で、渡辺ゆうかさんに伺った仕事に対する向き合い方の話では、**客観的に引いて見ることの大切さ**を教わりました。

●途中開催された**学級会**は、交流会とは違って、学びを共有し、咀嚼する時間でした。

●お昼休みにチームの**みんなと悩みを話せたこと**は、とても実りがありました。

グループワークについて

これまでの授業を通じて考えてきたことを共有し、時には意見をぶつけ合いながらも形にした後期課題での**グループワーク**。仲間とともに学び合った1年でした。

●**テーマ決め、責任分担**が難しい!でも、実際に自分がやりたいことを突き詰めて、それをアウトプットして、みんなにわかってもらうという作業は、非常に難しいけど、同時に楽しいことだなと感じました。もっと挑戦してみたいと思いました。

●**楽しい。でもきつい。**

●とにかく、**時間がなかった……(笑)**。なかなか集まれなかったのですが、それでもみんなで協力してできたので、とても楽しかったです。いろんな議論が飛び交い、紆余曲折しながら、なんとか形にできました。

●学校・現場・職場や日々のニュースで疑問に感じていたことを、チームのみんなに提案できたことや、**みんなの考えを聞いて、話し合えたこと**は、とても勉強になりました。

その後のキャリアプラン

当初はアートプロジェクトとの関わりを模索中だった受講生。1年経って、アートプロジェクトに飛び込みたい、自分のスキルを生かしたい——と目標が具体化してきました。

●アートに関わっていく「形」は1つではないこと、また**自分の経験**を生かした方がより良い形でコミットできるのではないかと考えるようになりました。

●入学当初はキャリアについては**ぼんやり**としていたのですが、学校へ通ったことで「有給スタッフを目指したい!」と具体的にビジョンを考えるようになりました。

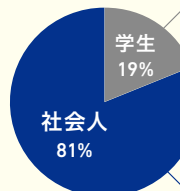
●アートプロジェクト、今までやってきた仕事、好きな書き手(河合隼雄、中沢新一、松岡正剛……)などが、**1つのつながったもの**として見えてきました。

●この学校でいろいろ考えたことを、**まちづくりの現場**で生かしていきたいと思えます。

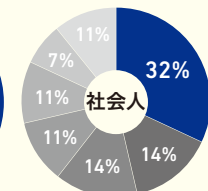
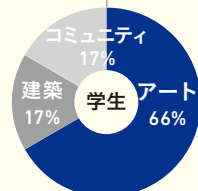
数字で見る受講生データ

2014年度
受講生数
32名
うち、
基礎プログラム
修了生数26名

Q1
属性は?

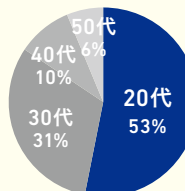


Q2
主な専門分野は?

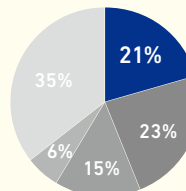


- アート
- 建築・街・コミュニティ
- サービス業
- 広告系
- 国際関係
- コンサルティング
- その他
- 整体師/税理士補助
- スポーツ選手マネジメント

Q3
年齢層は?



Q4
アートとの主な関わり方は?



- アートの仕事をしている
アートNPO / 一般社団法人 / 独立行政法人 / 絵画教室講師 / 通訳・翻訳
- ボランティアをしている
3331 Arts Chiyoda / とびろプロジェクト / 取手アートプロジェクト / 黄金町バザール / TERATOTERA / 六本木アートナイトほか
- 勉強している
東京藝術大学 / 横浜国立大学 / 立教大学 / 明治大学ほか
- 自主的な活動をしている
観客

受講生インタビュー

「思考と対話と技術の学校」には、学生や会社員、すでにアートプロジェクトに参加している方など、さまざまな立場の方が受講していました。「学校」を通しての気づきや想いなど、受講生たちの声を紹介します。

Interview 01

天羽絵莉子さん

税理士補助



— 受講したきっかけ・目的を教えてください。
「瀬戸内国際芸術祭」や「あいちトリエンナーレ」に鑑賞者として参加して、アートのおもしろさに気づき、その可能性を感じたことがきっかけです。そこから鑑賞者としてだけでなく、もっと現場に深く関わってみたいと思い、受講を決意しました。

— 1年間でふりかえって、感想をお願いします。
“はじめの一步”としては大きく、非常に充実した講座でした。個人的な課題は、受け身であったこと。交流会や課外活動などにも、もっと積

極的に参加できればよかったなと反省しています。“はじめの一步”を大切に、これからも活動していきたいと思います。

— キャリアプランに変化はありましたか？
当初は、現在のキャリアを捨てて、踏み込んでいかなくては、アートプロジェクトの事務局に携わることは難しいと考えていて、あまりリアリティが持てませんでした。ただ、受講していく中で、意識が変わりましたね。今は、仕事をしながらアクセスできる方法を模索したいと考えています。

アート以外の仕事

アート以外の仕事

— 受講したきっかけ・目的を教えてください。
「六本木アートナイト」でのワークショップ「カラダひとつプロジェクト」に参加したことがきっかけでした。以前から「アートに関わる仕事がしたい」と思っていたところ、本講座の情報と出会い、応募しました。

— 1年間でふりかえって、感想をお願いします。
あつという間の1年でした。仕事と学校の両立は、とにかくハードで、自分の知識の薄さに消沈することも多かったです。しかし、その分、気

づきや発見も多く、本当にたくさんのことを学ぶことができました。

— キャリアプランに変化はありましたか？
現職を退職し、5月からは、「学校」をきっかけに出会ったアートプロジェクトに携わる予定です。また別の現場でも、「広報から作品販売へとつなげること」、「記事を書くこと」、「たくさん展示を観ること」などなど、これから挑戦してみたいことはたくさんありますね。

相馬幸知さん

会社員



Interview 02

アート関係の仕事

で感想や意見を模造紙に書いたことです。それぞれが気持ちを吐き出した後、その場でディスカッションするという行程が新鮮でもおもしろかったですね。

— 1年間でふりかえって、感想をお願いします。
スクールマネージャーの存在は、とても偉大でした。特に、最終課題でのサポートには感動しました。企画書作成においても、客観的な視点でアドバイスをもらうことで、企画の精度も上がり、より良くなっていくことが実感できました。ありがとうございました。

Interview 03

上地里佳さん

アートNPOヒミング職員



— 受講後、意識の変化はありましたか？
これまで「アーティストの希望を実現することが、わたしたちの仕事」という姿勢を取りがちでしたが、ともに「つくりあげていく」感覚を持つことが重要なんだと感じるようになりました。授業ではアートに対するさまざまな考え方を学び、考える基礎を築くための勉強になりました。

— 印象に残っている出来事はありますか？
「思考を深める／想像を広げる」の鈴木謙介さん、北澤潤さんによる講義後、受講生全員

Interview 04

海老原周子さん

新宿アートプロジェクト代表
通訳・翻訳



— 受講したきっかけ・目的を教えてください。
これまで5年間ほど、移民の子どもや若者たちを対象としたアートプロジェクトを行ってきました。手探りで運営していく中で「どのような意識を持ち、つくりあげていくべきか」と考えるようになり、思考や手法について学べる、この講座の受講を決めました。

— 印象に残っている出来事はありますか？
後期課題のグループワークですね。所属もバックボーンも異なる受講生たちとともに、それぞれの強みと視点を生かして、プロジェク

トを考えることができ、楽しかったです。同時に「なぜそれをやるのか？」と突き詰めて考えていく過程は、楽しくも禅問答のように答えがない作業で辛く、産みの苦しみを味わうことができました。

— 挑戦したいことがあれば聞かせてください。
文化・国籍・言葉も異なる多様なメンバーだからこそできるアートプロジェクトの可能性を追求していきたいです。具体的には、ストリートダンスを扱うアートプロジェクトを東南アジアで展開できたらいいなと考えています。

アート関係の仕事

大学生

— 受講したきっかけ・目的を教えてください。
大学では、コミュニティ政策を学んでいるのですが、「瀬戸内国際芸術祭」に衝撃を受けて以来、アートプロジェクトに興味を持つようになりました。自らの関心事としてのアートプロジェクトを、さまざまな視点から深く追求したいと思い、受講を決めました。

— 印象に残っている出来事はありますか？
最終日の交流会で、森校長から「1年間の授業を受けてもアートに感染しなかったことを悪く思う必要はまったくない」と言っていただいたこ

とで、今まで自分では気づいていなかったアートプロジェクトとの距離感、無意識のうちに感じていた焦りから救われたような気がしました。

— 受講後、意識の変化はありましたか？
「アートやアートプロジェクトがなぜ必要なのか」という問いに対して、さまざまな視点から考えることができるようになりました。また、多様な分野で活動する受講生との協働を通して、自分の中にはなかった視点や感性に出会うことができ、今後の活動にも生かしていけたらと思っています。

Interview 05

平石直輝さん

立教大学
コミュニティ福祉学部 3年



Interview 06

山岸亮太さん

横浜国立大学 理工学部
建築都市・環境系学科 4年



— 受講したきっかけ・目的を教えてください。
地元で開催されるアートプロジェクトの立ち上げに、学生の立場として参画していましたが、経験のあるメンバーがいなかったため、チームの技術・知識不足を補うために受講することを決めました。

— 1年間でふりかえって、感想をお願いします。
最初は、漠然と「地域活性化のために、アートプロジェクトの運営スキルを身につけたい」と考えていましたが、授業を通して、アートプロジェクトの運営についてはもちろん、あらゆる

物事に対して、さまざまな視点から考える姿勢を学べたように感じています。1年間、本当にありがとうございました。

— キャリアプランに変化はありましたか？
地元での活動を継続する予定です。授業を通して、アートプロジェクトを運営していく中で、行政やアーティストなどのステークホルダー（関係者）、プロジェクトの目的を理解しながら、うまく人々をつなぐことが重要だと気づきました。そういった役割を担っていけるようになりたいです。

大学生

スクールマネージャー座談会

プログラムの構築やゲストのコーディネート、また1年間にわたって受講生の学びに伴走した、4名のスクールマネージャー。彼らに、開校初年度をふりかえるとともに、今後の構想を語ってもらいました。

聞き手：多田智美 (MUESUM)



▲左より、スクールマネージャー 及位友美、橋本誠、坂本有理、佐藤李青

——1年間おつかれさまでした。まずは、初年度をふりかえって、感想をお願いします。

佐藤 | 「思考と対話と技術の学校（以下、「学校」）」は、当初は、アートの現場で働く人々を対象に立ち上げたプロジェクトだったんです。これまでTokyo Art Research Lab（以下、TARL）では、単発講座を開催していましたが、参加者も毎回変わり、どうしても一方的な学びになりがちでした。そこで通年で学べる「学校」を開講したんです。でも実際は、受講生の大半がはじめてアートの世界に飛び込もうとしている人たちが……。

坂本 | 急遽、入門プログラムを用意したり、毎回ホームルームの時間にはゲストの紹介や招聘理由など、意図を共有することにしました。そもそもアートプロジェクトの現場を持つ方は、週末にイベントを手がけることも多いから、物理的に難しかったのかも。

佐藤 | また「学校」という名前から、「ゼロから学ぶことができそ

う！」と初心者にも受講しやすかったのかもしれない。受講生の層が昨年までとは異なり、僕たちにとっても新たな出会いの多い年になりました。

及位 | これまでのTARLの受講生はアート関係者が多かったのですが、今回は年齢も幅広く、職種や所属もさまざま。異なる背景を持つ人が集まり、お互いに刺激し合う姿が印象的でした。

坂本 | まさに学校のコンセプトでもある「学び合い」が自然と生まれる環境でしたね。

橋本 | 「学校」の特徴でもあるスクールマネージャーも、その「学び合い」を促進させるための体制です。受講生と伴走し、現場やゲストと受講生をつなぐため、授業がない日もFacebookで情報共有するなど、年間を通してサポートしていました。

佐藤 | 後期に入ると、初心者だった受講生たちも情報吸収量が増えてきて。「時間をかけて学ぶこと」の強みが実感できました。

——カリキュラムの構成で心がけていたこと、想いについてもお聞きできますか？

坂本 | 「学校」のキャッチフレーズは、「アートプロジェクトを動かす人たちのための学びの場」。企画を立ち上げる、というよりは、企画を形にする事務局で働く人材育成をテーマに構築していきました。

及位 | 午前と午後でプログラムを分け、午前はアートの現場で働くゲストの話や時間、午後はアートプロジェクトについて思考するための材料を提供する時間として構成。

橋本 | 都内の現場へフィールドワークしたり、レポート課題を出したり……、双方向の学びが生み出せるよう、インプットとアウトプットのバランスにも気をつけていましたね。

及位 | プロジェクトを運営していると、企画書の作成や行政との交渉など、魅力的で説得力のある言葉が必要になる場面も少なくありません。なので、「自分の言葉」を持つことも大切にしていました。

佐藤 | だからこそ、「学校」では、新しい世界に触れ、新たな情報を吸収する機会が提供できたらと思います。

坂本 | 実際に現場を支えるのは裏方である事務局です。「学校」を立ち上げる前提には、継続可能な組織をつくり、息の長い活動ができる人を育てるための講座をやりたいという想いがありました。

——実際に開講してみて、いかがでしたか？

佐藤 | 大変な現場だからこそ、いきいきと仕事をされているゲストの方々が印象的でした。受講生に伝えたいことは「忙しくて大変だけど、それ以上に、アートの荒波に飛び込むのは楽しいんだ！」ということだなと改めて思いましたね。

橋本 | お招きしたゲストには、僕たちや受講生の多くの人とも世代が近い20代・30代の方も多く、仕事の内容も身近に感じてもらえたのではないかなと思います。僕自身もおもしろい話がたくさん聞けました。

坂本 | 改めて、現場のスタッフは、1人で何役もこなすことも多く、マルチに動いているんだなと思いましたね。

及位 | きっと、その時々々のシチュエーションに応じて動いていた結果、たくさんのスキルが身につくことになったんでしょうね。

及位友美

【一般社団法人ノマドプロダクション理事 / voidsコーディネーター】

慶應義塾大学美学美術史学専攻卒業。取手アートプロジェクト事務局、急な坂スタジオ、フェスティバルトーカーなどをを経て現職。

橋本誠

【アートプロデューサー/一般社団法人ノマドプロダクション代表理事】

1981年東京生まれ。横浜国立大学教育人間科学部卒業。東京文化発信プロジェクト室勤務などをを経て2013年より現職。

坂本 | 確かに。記録写真や映像を撮って編集することになったり、ブログで文章を書くことになったり、会計を担当したり……。 “やらなきゃいけないこと”が、“できること”に変わっていった結果なのかもしれませんね。

——みなさんが考える理想のマネージャー像を教えてください。

坂本 | 淡々とこなす人！ですね。どんな荒波や逆境に出会っても、淡々と進める人。“淡々力”って大事だと思います。

橋本 | お祭り好きな人も必要だと思いますね(笑)。

及位 | 「なぜ、そのプロジェクトをやっているのか」がブレない人、ですかね。私は、恩師から「アートマネージャーは、あらゆるものの間に立ってジレンマを引き受けることが仕事」と言われたことがあります。どんなときも軸さえブレなければ、自分の立ち位置を見失わずに現場の混乱も避けられると思うんです。

橋本 | そうですね。「学校」がアートプロジェクトの現場に必要な知識や考え方をここで培い、現場に出るための準備ができる場として機能できたらいいですね。実際、この授業を経て、転職してアートの現場に入る受講生もいますし、数年後には一緒に働く人も出てきてくれると思います。

——今後のプログラムや展開を聞かせてください。

佐藤 | 2年目はグループワークや演習、アーティストとの出会いの場をつくり現場の意識に近づけていきたいなと考えています。議論の時間も、もっと設けたいですね。

及位 | どんなに個人が秀でていても、アートプロジェクトの現場は1人では動かせない。グループワークの課題などを通して、それを体感できる機会を増やせたら嬉しいですね。

坂本 | 今回不足していたと思うのは、美術に対する基本的な知識を学ぶ講座です。入門編、集中講座編など、受講生の理解度やニーズに合わせて講座の種類分けができれば、さらに可能性が広がるように思います。

橋本 | アートプロジェクトの現場は、ある種の閉塞感があるのも現実です。ここで学んでいった人たちが、将来アートプロジェクトの現場に関わっていくことで、現場にも新しい見方が取り込まれていったら、と期待しています。

坂本有理

【東京アートポイント計画 プログラムオフィサー】

1981年東京生まれ。Pratt Institute, Arts and Cultural Management Program 修了。アジアソサエティ (NY) 勤務を経て2010年より現職。

佐藤李青

【東京アートポイント計画 プログラムオフィサー】

1982年宮城生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。小金井アートフル・アクション！実行委員会を経て2011年より現職。

「思考と技術と対話の学校」平成26(2014)年度実施プログラム(基礎プログラムを除く)

入門プログラム

開講日 2014年6月26日[木] 19:30-21:30	コーディネーター 森司(東京アートポイント計画 ディレクター) 坂本有理(東京アートポイント計画 プログラムオフィサー)	佐藤李青(東京アートポイント計画 プログラムオフィサー) 橋本誠(アートプロデューサー/ TARL事務局長) 及位友美(コーディネーター/TARLプログラムマネージャー)
---------------------------------------	--	---

集中講座

第1回 2014年7月13日[日] アートプロジェクトを“伝える” ”広報&ツールを考える	[ウェブで伝える] 講師 中田一会 (株式会社ロフトワーク PR/コミュニケーションディレクター)	[現場で伝える] 講師 設計事務所ima (イマ) 小林恭+マナ
	[紙で伝える] 講師 多田智美(編集者/MUESUM)	

第2回 2014年9月21日[日] アート活動を“続ける”ための 組織について考える	[組織/人] 講師 菊池宏子 (米国・日本クリエイティブ・エコロジー代表)	[組織/お金] 講師 山内真理 (公認会計士/税理士)
--	--	----------------------------------

『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年→2012年』を読む

コーディネーター 熊倉純子 東京藝術大学音楽環境創造科教授 開講日 2015年1月30日[金]、2月6日[金]、13日[金]、20日[金]、22日[日] 企画 アートプロジェクト研究会	第1回 1月30日[金] 19:00-21:00 「第5章を読む」スタッフ×artproject ゲスト 樋口貞幸 (NPO法人アートNPOリンク)	第2回 2月6日[金] 19:00-21:00 「第6章を読む」社会×artproject ゲスト 久保田翠 (NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長)
---	--	---

第3回 2月13日[金] 19:00-21:00 「第7章を読む」企業×artproject ゲスト 杉浦太一 (株式会社CINRA)	第4回 2月20日[金] 19:00-21:00 「第8章を読む」アーティスト×artproject ゲスト 北澤潤 (現代美術家/北澤潤八雲事務所代表)	第5回 2月22日[日] 17:00-19:00 「第9章を読む」3.11以降の動向 ゲスト 小山村徹 (アーティスト)
---	---	--

TERA English

コーディネーター 弘川有希絵、内藤貴美子 (Art Center Ongoing) 開講日 2014年9月4日[木]、18日[木]、10月2日[木]、16日[木]、30日[木]、11月13日[木]、27日[木]、12月11日[木]、25日[木]、2015年1月15日[木]、29日[木]、2月12日[木]、19日[木]、26日[木] 共催 一般社団法人Ongoing	第1回 イントロダクション 第2回 レジデンス先での挨拶/絵画について 第3回 作品について話す/彫刻について 第4回 過去作について話す/ インスタレーションについて 第5回 ゲストトーク① 海外からの作家 ゲスト Martin Boyle (アーティスト)	第8回 鑑賞者と話す/ パフォーマンスなどについて 第9回 ゲストトーク② 国内の作家 ゲスト Karin Pisarikova (アーティスト)
--	--	--

第6回 作品プランを話す/映像について 第7回 会場スタッフと話す/写真について	第10回 友達と話す/アート施設について 第11回 別れの挨拶/アートイベントについて 第12回 ゲストトーク③ キュレーター ゲスト 木村絵理子(横浜美術館主任学芸員)	第13回 第14回 受講生によるプレゼン:作品または企画について
---	--	-------------------------------------

Toyo Art Research Lab

「思考と技術と対話の学校」

基礎プログラム

Annual Report 2014

監修

森司 [東京文化発信プロジェクト室]

制作・執筆

坂本有理、佐藤李青 [東京文化発信プロジェクト室]

橋本誠、及位友美 [一般社団法人ノマドプロダクション]

編集ディレクション&編集

多田智美 [MUESUM]

編集

永江大、和田真文 [MUESUM]

デザイン

加藤賢策、内田あみか [LABORATORIES]

イラスト

山内庸資 (pp.11-19)

写真

越間有紀子 (p.5下、pp.32-38)

印刷

山田写真製版所

発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階

TEL:03-5638-8800 E-mail: info-ap@bh-project.jp

発行日

平成27年3月23日

TARLの各プログラムについてのお問い合わせ先

TARL事務局 (一般社団法人ノマドプロダクション)

e-mail:info@tarl.jp tel:080-3171-9724 fax:03-6740-1926

「思考と技術と対話の学校」は東京アートポイント計画事業

「Tokyo Art Research Lab」の一環で実施されています。

東京アートポイント計画とは

地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

<http://www.bh-project.jp/artpoint/>

※「東京文化発信プロジェクト室」は、2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。

Tokyo Art Research Lab (TARL)とは

アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、共に作りあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

<http://www.tarl.jp>



東京文化発信
プロジェクト